

平成 29 年度生涯学習施設実習・研究活動報告

コミュニティの能力を高める学びの創出を目指して

-多様な人々の参画による地域学習活動のデザイン構築-



平成 30 年 3 月

大正大学社会教育主事課程

目次

はじめに・・・5

I. 地域文化創造館・・・9

- ・実習報告 地域文化創造館1 須藤彩乃（人間科学科3年）・・・13

「豊島区に愛着を一講師と受講生の両視点に注目して一」

- ・実習報告 地域文化創造館2 兵頭衣織（臨床心理学科3年）・・・19

「高齢者と青少年のコミュニティづくりー地域文化創造館から『都市部の生き方』をみる一」

II. みらい館大明・・・31

- ・実習報告 みらい館大明1 堤佐衣（日本文学科3年）・・・37

「地域の生涯学習活動から新たな学びをデザインする」

- ・実習報告 みらい館大明2 福本麗（歴史学科3年）・・・45

「若者の夢を広げるブックカフェーコーディネーターの仕事を通じて一」

III. 豊島区男女平等推進センター（エポック10）・・・57

- ・実習報告 豊島区男女平等推進センター 山田瑞貴（教育人間学科2年）・・・61

「すべてのひとが暮らしやすいとしまへー豊島区立男女平等推進センターの取り組みー」

IV. 研究ノート・・・71

- ・研究ノート1・・・73

大正大学エンロールメント・マネジメント研究所、地域創生学部 出川真也

東京農業大学地域環境課学部 地域デザイン研究室

「『室谷ふるさとキャンプ』の試行実践ー青年会・高校生・都市部大学生の協働による新たなムラづくりへの挑戦ー」

- ・研究ノート2・・・93

大正大学エンロールメント・マネジメント研究所・地域創生学部専任講師 出川 真也

本多龍（臨床心理学科3年）、平良菜月（人間科学科2年）、佐藤絵里花（地域創生学科1年）

「『あきた元気ムラ・山菜ネットワーク』と首都圏大学との連携による地域生業と若手担い手人材育成の相乗的活性化方策に関する研究」

おわりに・・・99

はじめに - コミュニティの能力を高める学びの創出を目指して -

エンロールメント・マネジメント研究所

地域創生学部 地域創生学科 専任講師 出川真也

1. 学習者としてのコミュニティリーダー像

今日、地域創生は「地域づくり Community Development」から「地域能力開発 Community Capacity Building」が志向される時代に入った。そこで求められる新たなコミュニティリーダーは、住民に寄り添いながらその成長に寄与し、自身も生涯にわたって学びつづけることができる人間であるといえよう。それは共に喜び・悩み・探究し続ける協働作業者である。社会教育・生涯学習も新たなフェーズに入ったといえるだろう。自分育てと人育てを相乗的に高めながら地域社会をよりよくしていく、学びと実践の場を形成すできるあらたな学習人材像が求められているのである。

2. 新たな学習手法への志向性

ICT の発達・普及により知識へのアクセスが容易となった現代では、いわゆる暗記型の学力はそれほど意味をなさなくなりつつある（ファデル他 2016）。大学教育においても知識の伝授よりもいかに学生が主体となった学びを促進させ汎用的能力を高めていけるかということに力点が置かれつつある。「大学に対する見方が『指導の提供機能を持つ機関』から『学びの創出をデザインする機関』へと変化してきている。」（S ゲルモン 2015）という指摘を真摯に受け止めなければならない状況が現出しているといえよう。

ところで、地域づくりにおいて「学習」は、その端緒として重要な役割と機能をもっている。AL (Active Learning)、PBL (Project Based Learning, Problem Based Learning)、SL (Service-Learning) といった新たな学習形態や、AR (Action Research) さらには PAR (Participatory Action Research) といった研究形態における昨今の議論と接合する要素が出てくるだろう。ここでも協働的实践活動としての地域に根ざした学習や研究の可能性と課題が発生してくるものと考えられる。

3. 協働的学習実践の可能性 - 交流・学習・実践による多分野の連携 -

ハミルトンは、地域づくりと成人教育に関する命題の一つとして「多くの地域社会には、才能やエネルギーの面から見ていろいろなタイプの住民が居住している。彼らが組織化されたとき、それらの能力を地域社会の向上のために活用することができる」（E.ハミルトン

著、田中雅文他訳 2003) と指摘する。地域社会の発展のためには、まず様々なタイプの住民の存在をポジティブに認めることが大事である。その多様性の中で組織化がなされたとき、地域創生の原動力となる。その契機となりうるのが多様な分野・領域の実践的な学問分野の参画による地域の学びの促進であり、まさにその担い手である地方・都市双方の多様な背景を持った若者たちなのではないだろうか。ここにも社会教育・生涯学習が期待される独自の機能と役割があると考えられる。

4. アセスメント（評価）可視化による主体的学習者の育成を目指して

前述の通り、近年、AL、PBL、SL、PAR といった様々な教育手法が提起されているが、これらは地域創生の教育・実践の具体的方法論として注目される。紙幅の都合上詳述できないが、例えば「互惠」「リフレクション（省察）」「カリキュラム統合」「プロジェクト型の学習」といった SL の基本概念を例にとってみても、これまでありがちであったその場の体験だけに目を向けるのではなく、前後の教育カリキュラムや将来のキャリアビジョン構築まで、より幅広い射程で構造化しようとする教育理論構築の努力が見て取れる。また指導者像も、「ファシリテーター」「協働探究者」など、従来の「指導者」像とは異なる多様な在り方が提起されており、教育・学習の責任性と主体性を地域や学生たちに委ねることによって自立を図ろうとする方法論も注目される。

今後、地域社会での実践を志向する社会教育・生涯学習分野においても、こうした方法論的研究・開発の動向を注視し取り組んでいくことが求められるだろう。特に学びの基礎的設計の根幹をなす効果測定やアセスメント（評価）の手法の開発は急務であると考えられよう。地域社会の固有の状況において現地実践者と共に丁寧にデータを蓄積しつつ評価・検証や議論を積み上げながら、これらの手法を鍛え上げる努力を重ねることがますます大事だ。

地域創生の教育実践は、(過保護的な) お客さん待遇の学生対応や、同じく(過保護的な) 管理型の地域対応では、不可能だ。地域社会とは、本来的に「(学校) 教育空間」としてつくられたものではない。地域での学びに参画するということは、定められた既定路線の学びの演技発表ではなく、のっぴきならない地域社会の現実の中で、そこに暮らす生身の住民と共に喜怒哀楽を経験することを通じて、地域の可能性を共に探求し、創り出していく生の営みそのものである。

そこではどんなに学問的スキルを駆使しようとも確かな決定的な将来予測がつくはずもなくリスクが伴うことを覚悟しなければならない。しかし逆説的だが、こうしたリスクを

乗り越えて、住民と学生双方が成長発達できる研究・教育・実践活動を可能にするためにこそ、多様な学問領域や様々な手法開発を伴う理論的・方法論的知見が求められるのである。このことこそ新たな地域創生時代の主体的学習・実践者を育成していくことにつながるものなのではないだろうか。

本書では、実習報告として豊島区の生涯学習施設、研究ノートとして新潟県及び秋田県でのフィールドワーク・実践を掲載した。今後とも多様な都市・地方両地域に視点を置きながら、地域の人々とともに地域づくりとしての社会教育・生涯学習の実践的研究を行っていきたい。

参考文献

出川真也「地域住民と大学・学生の多様な交流と学びが促進する地域創生」（「社会教育 12月号」一財日本青年館、2017）

Cファデル。Mピアリック、Bトリリング著、岸学監訳「21世紀学習者と教育の4つの次元ー知識、スキル、人間性、そしてメタ学習」北大路書房、2016

ハミルトン「成人教育は社会を変える」玉川大学出版部、2003

桜井政成・津止正敏編著「ボランティア教育の新地平 サービスラーニングの原理と実践」ミネルヴァ書房、2009

S.ゲルモン他『社会参画する大学と市民学習 アセスメントの原理と技法』学文社、2015

E. Hamilton, *Adult Education for Community Development*, GREENWOOD PRESS, 1992

I . 地域文化創造館

1. 地域概要

東京都豊島区は、東京 23 区の西北部に位置し、人口約 28 万 7000 人(平成 29 年 10 月 1 日現在)、面積 13.01 平方キロメートルの都市である。池袋駅を中心に、サンシャインシティや豊島区役所などの超高層ビル群、おばあちゃんの原宿ともいわれる巣鴨、多くの著名人が眠る雑司ヶ谷霊園や慈眼寺、染井霊園などがある。

豊島区は、平成 14 年度から「文化」を区政運営の基軸に加え、平成 18 年 3 月策定の「基本計画」において、生涯学習を文化政策に位置付けた。地域固有の歴史・文化資源を活用し、地域の個性を活かしたまちづくりを進めていくにあたって、地域文化創造・発信の担い手を育成することが、生涯学習の新たな役割として求められている。

また豊島区は、2019 年「東アジア文化都市」の国内候補都市に決定した。豊島区長である高野之夫氏は「『国際アート・カルチャー都市』を掲げる豊島区にとって、2020 年東京オリンピック・パラリンピックを目前に控えた 2019 年、世界の耳目が東京に集中する中で文化の祭典に豊島区の魅力を伝える絶好の機会」だと述べている。

2. 施設概要

このような背景のもと、『豊島区生涯学習推進計画 2010－2019』では、重要施策として、地域文化創造館の機能強化を挙げている。その中では、①地域文化の創造・発信拠点としての役割②エリアガイドボランティアの育成を重要視している。

豊島区地域文化創造館(以下、地域文化創造館)とは、豊島区に住む地域の方々の文化・学習活動の支援、地域の方が交流を通して豊かな地域社会の実現のために活動する場所だ。10 年前、主に大人の学ぶ場であった「社会教育会館」が区民全員のための施設として『豊島区立地域文化創造館』と改名された。また現在は、豊島区から公益財団法人とし未来文化財団が指定管理者として指名され、平成 26 年度～30 年度の 5 年間の管理と運営を行っている。

3. 各館の紹介

(1) 駒込地域文化創造館

駅から最も近い地域文化創造館。改築したばかりのため、全体的に綺麗である。またエレベーターもあるため、利用率が高い。受付前のショーケースには講座の制作物が飾られており、さまざまな利用者が気軽に興味を持てるよう工夫されている。



利用可能室：第 1 会議室、第 2 会議室、第 3 会議室、第 4 会議室、和室、音楽室、調理室

(2) 巣鴨地域文化創造館

巣鴨地藏通りの中に位置している。巣鴨の地域一体は巣鴨遺跡という江戸遺跡があり、巣鴨地域文化創造館の中庭を造ったときも「どろめんこ」という江戸時代のおもちゃが発掘された。現在は平成29年6月から平成30年3月末（予定）まで大規模改修工事のため休館している。



利用可能室：第1会議室、第2会議室、第3会議室、多目的ホール

(3) 南大塚地域文化創造館

大塚の地域は商店街を若い世代が継いだ関係で活気があり、行政と地域が協力した地元の力によって様々なイベントが行われている。5、6年前に大塚駅に通路ができたことで駅の南側と北側が交流するようになった。



利用可能室：第1会議室、第2会議室、第3会議室、第4会議室、第5会議室、第6会議室、和室、音楽室、調理室

(4) 雑司が谷地域文化創造館

最も大きな地域文化創造館。明治通りに隣接した位置にある。唯一PCルームがあるため、エクセルやインターネット、メールなどの講座も開いている。



利用可能室：第1会議室、第2会議室、第3会議室、第4会議室、和室、音楽室、美術室、工作室、陶芸窯、多目的ホール、第1練習室、第2練習室

(5) 千早地域文化創造館

昭和41年に建てられた最も古くからある地域文化創造館。住宅街の中に位置している。向かいには千早図書館がある。



利用可能室：第1会議室、第2会議室、第3会議室、第4会議室、和室、音楽室、美術室、調理室、陶芸窯

豊島区に愛着を —講師と受講生の両視点に注目して—

大正大学人間学部人間科学科 3年 須藤彩乃



【概要】

豊島区にある地域文化創造館で実習を行った。さまざまな講座のお手伝いを通じて、2つのことに注目した。

第1に生涯学習施設の利用者にとっての居場所づくりである。生涯学習施設は利用者にとって自分らしく過ごすための場所や、さまざまな人と交流できる場所としての価値が高いと考えた。

第2に講師・指導員を通じて地元愛が育まれることである。著名な区民による指導や、区について深く学べる機会を設けることが地元愛を育てると考えた。

【キーワード】

居場所づくり サードプレイス 地元愛

1. 実習の活動趣旨

今回地域文化創造館に興味を持ったきっかけは以前、としま案内人雑司ヶ谷の活動を実際に見聞きしたことである。としま案内人雑司ヶ谷とは豊島区が主催する「2010年度雑司ヶ谷ボランティアガイド養成講座」の受講生が豊島区雑司ヶ谷地区を案内する、ボランティアガイドの団体である。住民が自分の住む地域に関心を持ち、住民自ら講師となって地域の良さを他の人に伝えていく姿や、定年後の住民がとしま案内人として自らの居場所を確立していく姿を知ったことから生涯学習施設の講座のあり方に興味を持った。

地域学習活動やイベント等に注目しながら、地域文化創造館によって形成される居場所と地元愛の育成に関して理解を深めたい。

2. 詳細日程と内容

日程は以下の通りである。

9月12日：ガイダンス（南大塚）

9月16日：青島広志駒込少年少女合唱団 オータム・コンサート 2017（南大塚）

12月4日：5館の地域文化創造館見学

12月6日：第11回ベビーカーコンサート（雑司ヶ谷）

12月9日：発掘！ 巣鴨遺跡～発掘調査から見えた昔の巣鴨～（巣鴨）

12月26日：雑司ヶ谷子ども自習室

12月27日：実習を通してのまとめ

(1) 青島広志駒込少年少女合唱団 オータム・コンサート 2017（南大塚）

青島広志駒込少年少女合唱団とは、平成24年に駒込地域文化創造館が立ち上げた子どものための合唱団である。3歳児から中学生までの子どもたちを対象とした少年少女音楽教室がきっかけとなり結成された。豊島区在住の青島氏作曲のミュージカルをはじめ、年間を通して童謡・唱歌などを練習している。練習を通して感性を豊かにし、音楽の表現力や知識を身につけることで教養を高めるほか、年齢を超えた相互交流により協調性や社会性を育んでいる。（豊島区HPより）

今回は第6期生（2017年4月22日に開講）の中間報告会のお手伝いをした。パンフレットを手渡す作業や、ドアマン、片付けを行った。

客層は保護者だけでなく、地域のお年寄りの方も多く来場していた。



(2) 第11回ベビーカーコンサート（雑司ヶ谷）

会場にベビーカーにのせたままの赤ちゃんでも大丈夫な、泣いても騒いでも良い無料コンサートである。出演者の本番前のリハーサルを、子育て中のママさんたちの息抜きのためにしようと始まった。

椅子の席だけでなく、床に座れるようマットが敷かれているコーナーもある。また、椅子は移動が可能のため、車いすを席と席の間に配置することや、見やすいように移動できるようにしている。

演奏内容は、本格的なものだけでなく、子どもも親しめるような演出をしたり、皆がよく知るアンパンマンの楽曲を演奏したりと工夫がされていた。

当日は受付作業とアンケートの回収を行った。



(3) 発掘！ 巢鴨遺跡～発掘調査から見た昔の巢鴨～（巢鴨）

講師に特定非営利活動法人としま遺跡調査会を招いて行なう3回の連続講座である。今回は第3回目のまち歩きに参加者としての立ち位置で参加した。受講生は事前に2回の座学を受けており、第3回目で実際に巢鴨遺跡から出土した遺物にふれながら巢鴨の歴史を学び、まちを歩くなかで江戸時代という過去から現在までに様々な歴史が重なっている様子を観察する。大人数で歩いていると距離が離れ、解説の声が聞こえなくなってしまうため、ひとりひとりに聞き取り専用の無線機が渡され、それを通じてはっきりした声で説明を聞くことができる。

参加者は地元のお年寄りが多かった。



(4) 12月26日：雑司ヶ谷子ども自習室

小学校の冬休みの宿題である書初めを書道の先生に教わりながら書く講座である。対象は小学生と中学生である。毎年、すべての地域文化創造館にて行われており、今回は雑司ヶ谷にて行われた講座に参加した。

初めに講師の方から、どのように書けば上手にかけるのかレクチャーを受ける。その後は各自で取り組み、完成次第講師に見てもらう。学年ごとにそれぞれテーマが異なることや、個人によって課題点が別々のことから、1体1で講師から指導を受ける。時間は13：30～16：30までで、その間は自由に出入りしてよい。

今回は受付をした後、参加者として自分も書初めに取り組んだ。



3. 生涯学習施設はサードプレイスカ

生涯学習施設は家とも学校とも違う学び場である。学び場としての面だけでなく、居場所としての一面も持っているのではないかと。レイ・オルデンバーグが定義する居場所の説明を利用すると、生涯学習施設は「サードプレイス」に当てはまると考えた。

レイ・オルデンバーグの定義する3つの居場所は以下な通りである。

第一の居場所：自宅（ファーストプレイス）

第二の居場所：職場や学校など（セカンドプレイス）

第三の居場所：自宅と職場以外の自分だけのリフレッシュできる場所（サードプレイス）

サードプレイスには大きく分けて2つの形がある。マイプレイス型と交流型である。

マイプレイス型は、他者との交流は一切行うことなく、あくまでも個人個人がのんびりと「自分らしく」過ごせる場所である。今回参加した講座の場合、「子ども自習室」が当てはまると考える。

「子ども自習室」は最初に講師から全体的な指導を受けた後、ひとりひとりが自分のお



題に向き合って書初めを行った。その間、雑談などの不要な音は一切なく、各自が集中して行える時間が作られていた。学校や家と比較しても、一番集中できる環境だったと考える。

交流型は多くの人々が気軽に交流できることを目的として設計された場所である。今回参加した講座の場合、「第11回ベビーカーコンサート」と「発掘！ 巣鴨遺跡～発掘調査から見えた昔の巣鴨～」が当てはまると考えた。

「第11回ベビーカーコンサート」では、開演前に他の家族との交流が見られた。とくにふくろうのマスコットキャラクター、としまくんの周りには様々な子が集まり、それをきっかけとして親同士の会話も見ることができた。

「発掘！ 巣鴨遺跡～発掘調査から見えた昔の巣鴨～」では、説明のない移動の道中にちらほらと会話が盛り上がってる様子が見られた。聞いてみたところ、元々の知り合い同士ではなかった。

4. 指導者・講師に着目して

今回の実習で参加した講座にて強く感じたことは、「豊島区だからこそできる」という強みを持っていることである。

青島広志さんは豊島区駒込に住んでいる。地元の著名な音楽家から教わることで、より己の住んでいる豊島区への関心を高めるのではないかと考える。

巣鴨遺跡の講師は元々他の講座で地域文化創造館とやり取りをしていた別の講師から、紹介され、今回初めて地域文化創造館の講座で教鞭をとったという。巣鴨遺跡の講座で実際町歩きをしながら昔の絵地図と照らし合わせたり、コアな場所に行き話を聞いたりすることで、自分の住む土地の歴史を学ぶことができていた。また、講座終了後に今回の講師に得意分野を聞いた際、染井霊園などの墓地が専門であるというお話を聞いた。得意分野を聞くことで、今後作っていく講座の内容や依頼をする講師の幅が広がるという。指導者と生涯学習施設との交流から学びの輪が広がっていくことを学んだ。

ベビーカーコンサートは、午後から行われる別のコンサートのリハーサルを兼ねて開催されている。そのため演奏者はその都度変更される。地域に直接関連する特徴はないが、子育て中のお母さんが息抜きできる場を設けることで、地域文化創造館に足を運ぶ機会を増やし、親子だけでなく外との交流を設けることに寄与していると考えられる。

5. まとめ・提案

さまざまな講座のお手伝いを通じて、次の2点に注目した。第1に生涯学習施設の居場所としての立ち位置に関してである。生涯学習施設は利用者にとって自分らしく過ごした

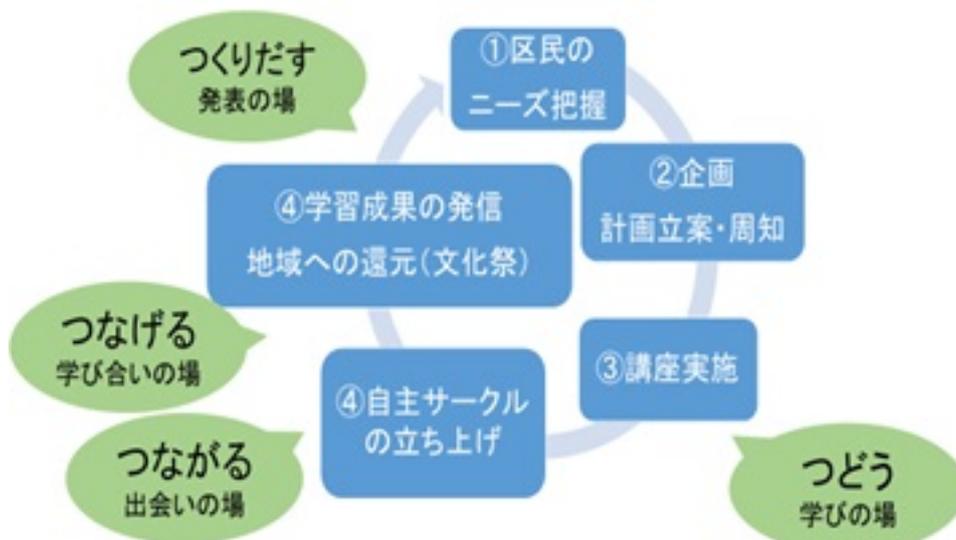
めの場所や、さまざま人と交流できる場所としての価値が高いと考えた。

第2に講師・指導員を通じて地元愛が育まれることである。著名な区民による指導や、区について深く学べる機会を設けることが地元愛を育てると考えた。

見知らぬ人と新たな交流を育める場は少ない。私自身、大学とサークル以外で作った人間関係はごくわずかである。今回講座に参加した中で、生涯学習を通じて交流の輪をもっと広げることができる可能性を感じる事ができた。生涯学習講座を通じて交流の輪を広げていくことができれば、受講生も講師も含めて住民により良い居場所を提供できるのではないか。

高齢者と青少年のコミュニティづくり —地域文化創造館から「都市部の生き方」をみる—

臨床心理学科3年 兵頭衣織



【概要】

地域文化創造館における実習から都市部の生涯学習活動による高齢者と青少年の関わりの創出可能性について考察。コミュニティ心理学的発想を足掛かりにしながら多様な世代層による学習を契機としたコミュニティづくりについて展望した。

【キーワード】

生涯学習活動 高齢者 青少年 コミュニティ心理学 コミュニティづくり

1. 実習の活動趣旨—コミュニティ心理学と社会教育—

私は、臨床心理学の中でも、特にコミュニティ心理学に関心がある。大学で臨床心理学科として、個人に対する援助を中心とした心理臨床活動を学ぶ中で、個人の問題は個人を取り巻く家族・友人・地域社会・共同体などの全体の問題として捉えるという考え方に強く共感したからだ。植村(2012)によると、コミュニティ心理学は、人の持つ短所や病理の修復に目を向ける以上に、長所や健康のさらなる増進に焦点をあてることが大きな特徴である。また、多種多様な社会問題に対し、単一の学問や研究者だけではなく、コラボレーション(協働)を行い、積極的な介入を行うことにより、コミュニティやそのメンバーの生活の質を高めることを目指している。 [1]私は、コミュニティ心理学を基盤とした社会教育主事として活躍したいと考えている。

本実習は、今後コミュニティ心理学を踏まえ、社会教育主事としてファシリテートを行ううえで、必要な視点や利用者を知ることを目的に行った。文化都市として力を入れる豊島区の生涯学習施設の役割や利用者の実態を学ぶため、7日間は職員として参加し、利用者として1日計8日間実習を行った。

2. 活動の詳細日程

月日	内容	場所	概要
9月12日	ガイダンス	南大塚地域文化創造館	・今後の日程確認 ・施設概要の説明
9月24日	ワンコイン落語会	雑司ヶ谷地域文化創造館	雑司ヶ谷鬼母神参道「案内処」のオープンを記念し500円で落語を行う。 ・チケットもぎり・落語鑑賞・後片付け
9月25日	施設の役割・訪問	南大塚地域文化創造館集合→各館	・施設の概要・挨拶
10月20日	文化祭準備	駒込地域文化創造館	学んだ内容や活動などの学習成果の発信の場
10月21日	文化祭1日目	駒込地域文化創造館	・展示・場内アナウンス・誘導・体験教室に参加・撤収等
10月22日	文化祭2日目	駒込地域文化創造館	
10月24日	文化カレッジ参	駒込地域文化創造	文化祭で声をかけてくださっ

	加	館	た料理教室の自主グループに参加 ・小籠包やスーラーメンづくり・栄養バランスについての講義
10月28日	実習のまとめ	駒込地域文化創造館	・報告書について ・実習に参加した感想等

Table1.活動内容と日程

2. 施設実習を通して

(1) 地域文化創造館の活動—施設の役割・訪問（9月25日 各館）—

生涯学習施設とは、民間や一般行政を含めて、教育意図をもって生涯学習を推進している施設を指す。[2]生涯学習施設での活動は、学習者にとってさまざまな役割を持っている。実習では、半日で約10キロを歩きながら、巣鴨を除く地域文化創造館4館を訪れた。以下、生涯学習施設『地域文化創造館』について記述する。

地域文化創造館は、①南大塚②駒込③雑司ヶ谷④巣鴨(現在、改修工事中)⑤千早の計5館からなる。事業内容は大きく分けて4つあり、一つ目は、区民の学習ニーズに対応する各種講座や教室、サークル活動などの『文化カレッジ』である。文化カレッジは、平成28年度には、5館で86講座を行い、男性をターゲットにした「蕎麦の楽しみ(南大塚)」や「トレッキング講座(千早)」は参加者平均70歳を超える講座などもある。また、次世代を担う人材育成として「夏休み親子版画教室(巣鴨)」や「親子で楽しむ調律体験」などの親子体験教室も特徴的だ。また全体の文化カレッジの応募倍率は、約1.1倍を記録し、人気であることがわかる。二つ目は、地域の文化資源を活用した各種講座・教室である『地域文化事業』だ。「豊島区生涯学習推進計画2010-2019」に地域文化創造館の機能強化の一環として、地域の文化資源や歴史を取り上げる地域学習を挙げている。5館共通でエリアガイドボランティア育成事業を行っており、平成30年度までに各館(南大塚・巣鴨・千早)で「としま案内人 雑司ヶ谷」のような団体の育成を目指している。地域文化や歴史を取り扱う講座やとしまガイド育成講座～入門コース～として、港区のガイド体験に参加したり、模擬ガイドや伝え方・話し方を学ぶ講座も開講しているのだ。三つめは、地域の団体等と協働して実施する各種事業である『地域協働事業』だ。各地域の特色・キーワードを踏まえイベントを行っている。大塚地域文化創造館ではバラのフォトコンテストが行われ、美しい写真が館内に並ぶ。四つ目は、そのほかの冬休み子ども自習室やベビーカーコンサートなどのイベントだ。

	各館のキーワード	見どころ	雰囲気	文化祭について
南大塚	まつり・バラ	ホール	大きい	一番大きい
駒込	ソメイヨシノサクラ	エレベーター	高齢者も◎	来場者多
雑司ヶ谷	みちくさ市	体育館	駅直結	子ども合唱がポイント
千早	まんが・モンパルナス・小学校	企画のおもしろさ	公民館らしい	
巢鴨	日本サクラソウ	改装中		改装中

Table2.各施設の役割

(2) 広報の重要性—ワンコイン落語会（9月24日 雑司ヶ谷地域文化創造館）—

500円で楽しめる恒例イベントである「雑司ヶ谷ワンコイン落語会」は、雑司ヶ谷鬼母神参道(きしぼしん)の「案内処」のオープンを記念し、はじめた。私が参加した第27回では“上方落語の爆笑王”桂雀々師匠が行った。

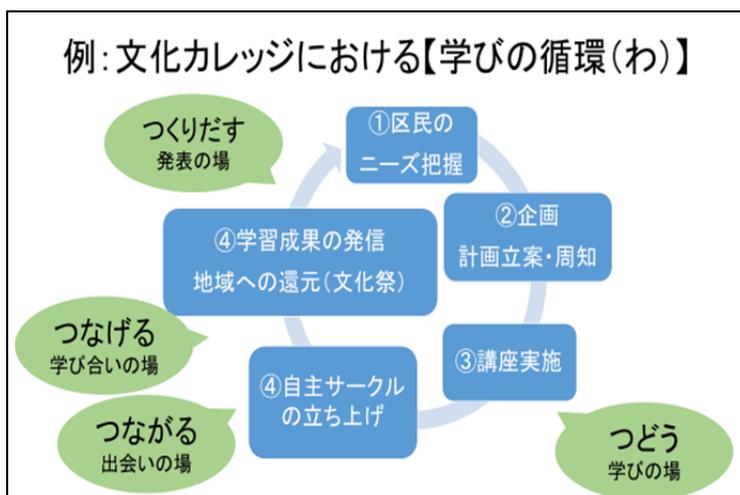
実習では、チケットのもぎりや落語の鑑賞・後片付けのお手伝いをした。チケットは、当日券も早々に売り切れており、大変人気であることが伺えた。また、私自身も初めて見る落語の面白さを感じることができ、500円という金額の手軽さや入門編としてもわかりやすい内容だった。参加している区民のみなさんも大学生ぐらいのグループや小学生など少数ながらさまざまな年代が見受けられた。特に印象的だったのは、閉演後に次の第28回のチケットを購入するために長蛇の列ができていたことだ。慣例イベントは、ファンが生まれ口コミの機能を果たしているのだと実感した。

出演者の桂雀々氏からは、職員に対する感謝の言葉があり、出演者と客（市民）を繋ぐイベントの企画・運営をする人の大切さを再認識することができた。一人でも多くの人に“知ってもらう”“触れてもらう”活動こそ、社会教育主事が生涯学習施設で活躍するうえで大切だ。また今回、生涯学習施設が持つ文化に触れる機会の提供という役割(教育意図をもった学習機会の提供)を目の当たりにして、一人でも多くの人目に触れる広報について考えさせられた。

(3) 第34回駒込文化祭り〈9月20日・21日・22日 駒込地域文化創造館〉

地域文化創造館にとって文化祭は、『豊島区生涯学習推進計画2010-2019』の中の4つの理念である「つどう・つながる・つなげる・つくりだす」のつくりだすに位置する。たとえば、文化カレッジにおいて、市民のニーズを把握し、講座(企画)を計画立案や周知を行い、講座〈企画〉を実施することが『つどう』に位置する。その後、参加した区民が関心をよせ継続を希望し、自主サークルを立ち上げると『つながる』という機能を果たす。

この自主サークルでは、『つなげる』という区民同士の学び合いや深い交流の場となる。そして、なんらかの学習成果を『つくりだす』ことで4つの理念は達成される。また、それらの学習成果の発信の場として文化祭が行われ、他の形でも学んだ内容や活動が地域に還元を行う。そして、い



くつかの自主サークルでは、受け手だった区民が先生となり講座を行うこともある。(図2-1)

今回、私が参加した駒込地域文化創造館の文化祭は、副題が「みんなでつくるみんなの文化祭」であり、2日間の文化祭と事前準備の中で区民(学習者)のパワーを感じることができた。

Table3.豊島区の四つの理念

3. 幸福な老い方とコミュニティづくりについて

(1) 事前準備活動でのお年寄りとのふれあいから

65歳以上の人口が総人口に占める割合を高齢化率という。この値が7%を超えた社会を高齢化社会、14%を超えると高齢社会、さらに21%を超えた社会を超高齢社会というが、わが国は2007年に超高齢社会に突入しているのは多くの人も御存知だろう。小田(2003)は、高齢者は、もはや特別な存在でも無条件に保護されるべき立場でもなく、年齢を超えて他世代と対等な存在として共生し、社会の中へ積極的に取り組むべき存在と捉えている。また、現在では日本に限らず「幸福な老い」や「上手に年を取ること」と訳されるサクセッスフル・エイジングが世界的にも注目されている。このサクセッスフル・エイジングとは、健康で長生きしていて満足と幸福を感じられるような老いの過程のことを指すが、労働活動はもちろんのこと、ボランティア活動・地域活動・学習活動などを含む社会的関係性を持つ活動に参加することも必要である。[1]以下、文化祭の事前準備を通して感じた「幸福な老い方」について述べる。

駒込地域文化創造館は、館内にエレベーターが設置されており、他の地域文化創造館より比較的年齢層が高い傾向にある。また改装したばかりで、廊下や教室には、絵や写真を飾るため用のフックが常時設置されていることなども特徴だ。初めて訪れた際には、ホールで机を囲み、楽しそうにおしゃべりする利用者を見て「年齢層の高い大学みたいだな」「ホテルの廊下ようだ」と感じた。

私は、事前準備として押し花で作られた絵画を壁に下げる高所の展示作業を手伝った。利用者のほとんどが高齢者ということもあり、脚立を使っての高所作業や重たい額の設置は施設職員や施設のアルバイトが率先して行った。どの利用者も手を休めずに準備に勤しみ、『こんにちは、何かお手伝いすることはありますか?』と声をかけると『手伝ってくれてありがとうね』『これはできるから、重たいものだけお願いします』など任せっきりでなく、自分たちのできることは自分たちで行うということを心がけていることが感じられた。また、文化祭当日の受付は、サークルごとに担当を出し、パンフレット渡しや人数計測を行っていた。副題のみんなで作る文化祭という言葉を改めて認識させられた。

高齢者といわれる人々が活き活きと本番の文化祭の発表(歌や朗読・展示など)に向けて準備をしている姿は、力強いものであった。彼らの活動は、高齢者の教育的ニーズ¹としてマクラスキーは、表現的ニーズ (expressive need) について高齢期に当たる学習者がそれまでの職場や家庭における役割から解放された後、学習を通じて資格や知識、技術を取得することよりも、学習を通じて自分を表現することによって得られる喜びや満足を得ようとする傾向が強いことを指摘していることに該当しているだろう。また皆で協力しながら行う作業全てから「楽しい!」という雰囲気を感じる事ができた。「上手に年を取る」ということは、他者に手を借りながらも老いの過程を楽しむということなのかもしれない。地域文化創造館は、生活やQOL²を豊かにする環境が整っていた。高齢期の幸福は、高齢期に生じる様々な喪失をいかに乗り越えていくかが大事である。そして、地域文化創造館の文化祭は、喪失に対する対抗手段となり高齢者にとって幸福な老い方に繋がっていた。

(2) 高齢者神話というラベリング—体験教室を通して—

¹ ①対処的ニーズ(パワー低下への対処と生存のためのニーズ)②表現的ニーズ(活動それ自体に見いだされる喜びのニーズ)③貢献的ニーズ(参加と貢献を通し認められたいというニーズ)④影響的ニーズ(生活する環境に影響を与えたいというニーズ)⑤超越的ニーズ(精神的に伸び続けたいという欲求・ニーズ)という五つのニーズ

² 「生(命)の質」「生活の質」「人生の質」

今日、「高齢者神話」³と呼ばれる「老人は・・・である」というエイジズム（ageism:高齢者差別）が問題視されるようになってきた。「高齢者はぼける、病気になる」「生産的仕事に関わらない」「変化に抵抗する」といった多くの思い込みが、誤った知識であり、真実ではないということが明らかになってきたのである。通常、ラベリングはスティグマ（社会的烙印。例/身体：奇形、性向：同性愛、社会集団：人種）に対してなされるが、誰もがなる高齢（者）でさえいまはスティグマになっている。[1]私は、文化祭を通して、はじめて自分自身が高齢者神話という偏見をもっていたことを認識した。

文化祭は、サークルの新しい会員を募集の機会でもある。高齢化を伴うサークルの存続問題は根深く、各サークルでは、文化祭の体験教室を通して自分たちの活動やメンバーを知ってもらおうと工夫を凝らしている。駒込地域文化創造館の文化祭では、ポルトガル刺繍・押し花しおり・フラワーリース・太極拳体験といって名前だけでは伝わりづらいサークル活動を体験教室として行った。

体験教室では、学習者として学んだ知恵（知識）や技術（経験）を参加者に丁寧に伝える様子が見受けられた。マクラスキーは、高齢期の生活では、他者や地域のために活動参加し、貢献することで他者に認められたいという貢献的ニーズや高齢期は生理的機能が低下し、社会的役割が減少したとしても精神的に伸び続けたいという欲求である超越的ニーズがあると主張している。高齢者は「非生産」「古風で保守的」「物覚えが悪い」といったことはなく、むしろ先進的で柔軟性があった。実習に参加するまで、私は、都心の核家族で高齢者との同居経験や接触経験に乏しく、高齢者との社会的距離は遠かった。しかし、実際に顔のみえる相手と関わることで、自身の老化も楽しみに思える出会いになった。心理学者エリクソンは、個人が高齢期に遭遇する数々の危機に直面し、自らの課題を解決する過程は、その姿を見ている若い世代を同時に育て、将来彼らが高齢期を生きていくときの良きモデルとなるだろう、と指摘している。

（3）コミュニティ感覚—生涯学習施設としての役割—

コミュニティ心理学において、コミュニティが成立するためには、そこに集う人々がそれを自分たちのコミュニティであると認識し、愛着を持ち、維持・発展させようとする意欲が必要だとされている。これは、「心理的コミュニティ感覚」「コミュニティ感覚」といわれ、世の中での『居場所感(sense of place)』を指す単語である。コミュニティ感覚では、所属感により安心と安全感といった情緒的安心感を得ることで自己開示でき、それらを獲得した個人はコミュニティに貢献する行動を行うといわれている。また、メンバーの各々がコミュニティに影響を与えていると感じるような自己効力感が生まれる。 [3]

³ アメリカ国立加齢研究所(NA)の初代所長 RoberButler が造語した(船津,2003)。

地域文化創造館の利用者は、上記のコミュニティ感覚が高く、人生への満足感や主観的幸福感の高さ、孤独感の低さが感じられた。文化サークル(朗読)利用者の女性の方は「(地域文化創造館を利用する多くの)皆さんは複数のサークルをかけもちしているね。シニアは時間がたくさん余っているから複数に所属していたり、次々に講座に参加したりね……新しいことを知るのも楽しいし、経験を積むことや交わりができていくということも面白いからここ(地域文化創造館)にはとても感謝しているわ」と述べた。

生涯学習とは、生涯にわたって行う学習であり、特に学ぶ人の意欲が重要となる。[2] 学ぶ人の意欲を最大限に生かす場づくりが生涯学習施設の役割である。また、場所を提供するだけではなく、場所が居場所になるように、様々な講座や趣向を凝らした文化祭を行うことで環境づくりを担うのが社会教育主事や施設職員の役割であろう。

4. 残された課題と今後に向けて

(1) 自身の分野と関連して

私は、臨床心理学科に在籍しており、そのなかでも少年非行・高校生(思春期)の分野に強い関心がある。青少年期の非行・犯罪の背景には、様々な特質、形成過程や成立機序、関与する諸要因が挙げられるが、「自分ではできないやつ(劣っている)」「居場所がない」「本当の自分を誰にもだせない」といった家庭や貧困、発達障害・社会的排除の問題が多い。また多くの青少年期の子どもたちも、コミュニケーションにおいて重要な役割を果たす言語能力が未発達なこと等により様々なトラブルや問題行動を起こすことが特徴として挙げられる。[4]そして、それらの要因は、彼らの自尊感情を大幅に引き下げている現状がある。

私は、文化祭で声をかけてくださった『サークル：雑司ヶ谷 伝統文化を育む会』の活動に参加した際に、初対面の85歳の女性に「洗い物なんかいつでもできるんだから、先生に包丁の使い方教えてもらいな」「若い人がいると元気がでるね!ありがとう!」そんな言葉をかけられた。1人暮らしの私は、普段コンビニエンスストアの弁当ばかりだ。優しい言葉と皆で小籠包や酸辣湯大根のナムルを作り、美味しくかつ温かい食事をとるという行為に心がいっぱいになった。「またきてね」という言葉が、その日の午後の授業の頑張りに繋がった。みんなで食卓を囲むことは自尊感情に大きく関与するという研究結果もある。[5]二時間ほどのサークルでの活動での食事が、自尊感情の形成に関与することを肌で感じた。

非行・犯罪は様々な要因が、相対的・多元的に生じる。(Table5 参照)防犯活動や青少年育成は、犯罪抑止としても効果的である。また、石川(1991)は非行少年の治療処遇とは「孤立や不信から救い出し、人格の発達と社会性の促進を促すこと」と定義している。[6]私のサークルでの体験は、問題行動を起こす青少年たちに必要な“誰かが真剣に向き合っ

くること”“自分にもできる！という経験”という人格の発達や社会性の基盤になる活動だろう。



Table4.サークル活動をする参加者

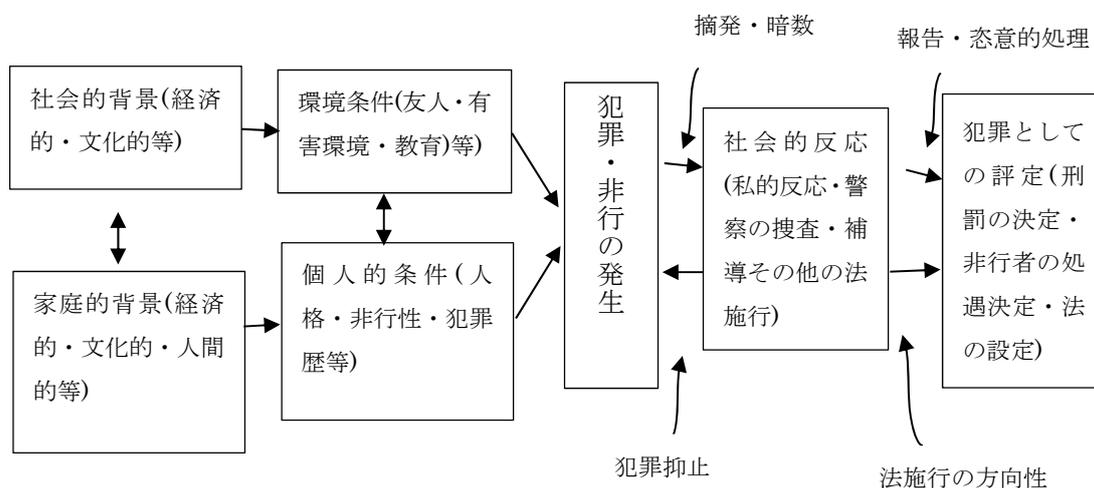


Table5.非行(犯罪)現象を規定する要因群とその関係

(2) 今後の展望

本実習での実習報告として、NPO 法人 いけぶくろ大明のみらい館大明『大明祭』にて、ポスターを展示した。その際には、少数ながらも関心を寄せる方も見受けられた。豊島区には、地域文化創造館の他にも区民広場や子ども家庭支援センター、みらい館大明などの様々な学習活動の場がある。各施設とも利用者の年齢層や活



Table5.関心を寄せる若者(大学生)

動内容に特色があり、大明祭にてポスターに関心を寄せる層は、地域文化創造館を普段利用しない大学生や子育て世代の方であった。現在、豊島区では「豊島区生涯学習センター」として窓口を用意し、区民が学習に関するサービスを一括して受け取ることができる窓口としてワンストップサービスの実現に向けて進んでいる。今後の社会教育主事は、区内で行われる様々な生涯学習情報（講座等）を収集し、インターネットのみではなく、紙媒体などを利用しながら多様な区民に届けること求められるだろう。

駒込文化祭りの閉会式で、豊島区長である高野氏は「新たなものを生み出すよりも、地域文化創造館の活動や市民の活動を評価し、区として広めていくこと(広報)が大切になる」と述べた。私自身も本実習に参加する以前は、生涯学習施設を利用したことがなかった。活動を知らない区民に学びの機会の提供することばかりに目を向けるのではなく、活動を行っている区民が学び続けられる環境の整備・環境づくりも社会教育主事として大切な活動である。そして、一人でも多くの人に、既存の活動を広めていくことは、学習成果の評価としても必要だ。

また今回、高齢期の活動を知り、若者が生涯学習施設の利用者のような生き活きとして、面倒みのいい大人に出会う機会があれば面白いと感じた。エリクソンのいう高齢期を生きていく際の良きモデルとしてだけでなく、高齢者にとっても「自分のための活動を誰かのための活動」へシフトすることは、新しい公共の「地域の課題等を解決していくタイプ」に繋がっていくだろう。[2]社会的課題(子育て・若者支援等)に関連した内容にチャレンジする機会を提供することも考えられる。

高齢期の学習や生涯学習施設の学習者にとっての役割を目の当たりにして知ることで、学習者同士が相互的に学び・成長できるコミュニティづくりが社会教育主事として必要だと感じた。また、社会教育主事として、コミュニティに積極的に参加し、信頼を得て、能動的に活動しながら学習者の自己主導（自己指導）生を引き出していく態度も大切だ。今後、学習機会や適切な施設を提供するために相談や助言ができる学習コーディネーターという人材がポイントになってくる。社会教育主事の以上のような役割を意識しながら学習コーディネーターとして活躍していきたい。

本実習を行う機会を与えてくださった大学関係者の皆様、実習を行うにあたり、協力してくださった公益財団法人としま未来文化財団の保木井様、各館担当職員の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。実習で学んだ生涯学習の役割や心の持ちようを今後の生き方に役立て、学び続けていきたいと思えます。

引用文献

- [1] 植村勝彦, 現代コミュニティ心理学, 財団法人東京大学出版会, 2012.
- [2] 伊藤俊夫, 新訂 生涯学習概論, 株式会社ぎょうせい, 2007.
- [3] 植村勝彦, よくわかるコミュニティ心理学 [第二版] , ミネルヴィ書房, 2012.
- [4] 一般社団法人 クオリティ・オブ・ライフ支援振興会, 青少年ケアストレスカウンセラー公式テキスト, 総合法令出版株式会社, 2016.
- [5] 成. 富田圭子大谷貴美子, “家庭の食事時間の楽しさが児童・生徒の自尊感情に及ぼす影響,” 日本食生活学会, 2008.
- [6] 石川義博, 非行少年の個人精神療法, 1991.

II 未来館大明

1. 地域概要

みらい館大明は、豊島区池袋西地域の要町内に位置する。

(1) 豊島区

人口は平成 27(2015)年 1 月現在で約 27 万 6 千人。人口密度は 211.8 人/ha と全国一だ。年齢別人口は、25～44 歳の階層の割合が最も多く、次いで団塊の世代が続いている。若年層の割合が減少する中で、40～64 歳、65 歳以上の割合は増加している。

外国人住民は増加傾向にあり、平成 27(2015)年 1 月現在で約 2 万人と、全区人口の約 7.8%に及んでいる。その半数以上が中国国籍者だが、その他アジア諸国の国籍者数も増加している¹。

区内には、女子栄養大学、大正大学、帝京平成大学、立教大学、東京音楽大学、学習院大学の 6 つの大学が存在する。学生の地域活動への参加や高度な知的資産を積極的にまちづくりへと還元し、地域のまちづくりに貢献している²。

池袋は新宿、渋谷とともに「副都心」に位置づけられ、昭和 40(1965)年以降の高度成長期には商業機能の集積が一層進んだ。

(2) 要町周辺

要町を擁する池袋西地域の区内における人口は、平成 22(2010)年には 35510 人で、割合は 11.4%であった。

この地域は、江戸時代には野菜類の生産を中心とした農村地帯だった。明治 36(1903)年に日本鉄道豊島線「田端～池袋」間が開通し、池袋駅が開設された。その後、昭和時代を通して多くの電線が開通した。

昭和 23(1948)年には秋田雨雀らが舞台芸術学院を設立した³。そして、平成 2 (1990)年に東京都芸術劇場が設立された。

池袋駅西口から延びるアゼリア通りをはじめ、立教通り、山手通りなどを中心に、商業や教育などの生活を支える機能が集中し、賑わいを見せている。

これらのことから、交通、芸術、生活基盤が整えられた地域であることがわかる。

¹ 豊島区都市整備部都市計画課「豊島区都市づくりビジョン」平成 27(2015)年 3 月発行

² 「豊島区と区内大学との連携・協働に関する包括協定」…人的・知的・物的資源の交流、教育機能の向上、豊かな地域社会の創造を図るため、平成 19(2007)年に豊島区と区内大学との間に締結された協定。「豊島区都市づくりビジョン」参照。

³ 秋田雨雀…劇作家・小説家。島村抱月に師事、のち社会主義運動に参加。「埋れた春」「国境の夜」などの戯曲があり、晩年は俳優の養成にも尽くした。新村出「広辞苑 第六版」岩波書店 昭和 30(1955)年 5 月初版発行

2. 施設概要

(1) みらい館大明

平成15年に豊島区立大明小学校が閉校となった。旧池袋第五小学校との統合による閉校であったため、新しく跡地を利用し、現在、地元有志の方々と構成されたNPO法人いけぶくろ大明によって生涯学習施設として管理・運営を行っている。

みらい館大明は、主に、地域づくり事業、「学び」に関する事業といった2つの事業を中心に展開されている。地域づくり事業は、更に3つに分類され、地域交流イベント、施設の貸出事業、防災拠点といった事業から構成されている。「学び」に関する事業では、子どもの健全育成、若者支援事業、シニア対象事業、生涯学習講座、国際交流などのさまざまなジャンル・年齢層へ向けた講座・イベントが行われている。



みらい館大明

(2) ブックカフェ

元小学校の図書館を利用し、人と本が会い、若者が成長できる「ブックカフェ」として運営している若者支援事業だ。この取り組みは豊島区とNPO法人いけぶくろ大明が協働で実施している。「元図書館」の施設だが、図書館という枠を超えた施設となっている。ブックカフェ内の本は実用書から漫画まで幅広く取り扱っており、また飲食可能だ。コーヒーを飲みながら本を読んだり、いろんな方と出会いおしゃべりしたりなど自由な使い方ができる。また、企画を持ち込み、実際に実現させることも可能である。

また、ブックカフェ内ではさまざまなイベント・プロジェクトを開催している。



ブックカフェ 入り口



本棚の一部

(3) 豊島区・要町・大明とまちづくりについて

豊島区は、「池袋駅西口駅前街区再編まちづくりの推進」を掲げており、その方針として、「多世代や外国人など多様な人々が芸術・文化を中心に交流や情報発信できる都市空間の創出や機能を誘導し、新たな文化と産業を生み出すまちづくりをめざす」としている。



上：東京都芸術劇場 下：立教通り

また区は、「商業機能を中心に業務、文化、交流、娯楽、情報発信など都市機能が高度に集中したにぎわいと活力にあふれ、東京芸術劇場と立教大学が立地する芸術文化の舞台にふさわしく、新たな文化の発信と産業の創出を支える安全性の高い都市をめざしている。



人々で賑わう池袋西口駅前

以上のことから、みらい館大明が存在する豊島区池袋要町地域は、歴史の中で築き上げた地域特性を生かし、多様性を持った地域の人々(外国人、大学生を中心とする若者)ともうまく連携し、新たな文化的価値を見出そうとしている場所であると理解される。

1. 実習目的

実習を通して、社会教育の現場の有様を体感し、社会教育に携わる者の役割を学びたい。また、大明の特色、地域においての役割と立場を理解し、一社会教育施設としての発展を身をもって体感したいと考えた。実習を通して、施設の概要を掴み、そこから自らの力で新しい取り組みを提案することができないか試みた。

2. 実習内容

一回目 9月2日(土)

二回目 9月12日(火) 日本語サークル参加、個人業務①

三回目 9月19日(火) 日本語サークル参加、個人業務②

四回目 10月9日(月) 企画提出

五回目 10月16日(月)

六回目 10月25日(水) 大明祭準備

七回目 10月28日(土) 大明祭参加(団体)

八回目 10月29日(日) 大明祭参加(運営)

40時間の実習を八回に分けて行った。上記の通り実習中は、大明祭という大きなイベントにも参加させていただいた。また、興味・関心のある分野に沿って、自主的な活動をする機会を提供していただいた。

(1) 通常業務

1) 受付業務

ブックカフェを運営していく中で、欠かせない業務の一つであった。実習を通して、一部の地域の方々と顔見知りになることができた。



ブックカフェ内の書架

2) 掃除、営業準備

施設を運営するにあたっての必須業務の一つ。人々にとって居心地の良い空間を作るために、毎回丁寧に行った。

3) 専用 HP 更新

ブックカフェのホームページの更新をさせていただいた。挨拶と、実習に対する心構えを記した。実習で最初に行った形として残る業務であった。

4) 大明祭準備、運営

10月28日(土)、29日(日)にみらい館大明内で行われたイベント、大明祭の準備と運営を体験した。前日の準備と当日の運営を体験させていただいたのだが、本番当日、参加者の方々の満喫する姿を見かけるたびに、充足感を得ることができた。

(2) 個人業務

1) 『にほんごさーくる コンニチハ!』の手伝い

『にほんごさーくる コンニチハ!』

◇開講日時：毎月第一、二、三火曜日の午後7時～8時30分

◇会費：毎月500円

◇概要：施設に訪れている外国人の方々に日本語を教える。講師は大明の職員や、地元の有志の方々である。あくまで参加は本人の自由意志であるため、毎回の参加を強制することはない。

◇お手伝いをした対象：中学生の中国人男性、高校生の韓国人男性

◇方法：教材に沿って問題を解いていき、理解しにくいもの、誤回答したものについて解説していく形をとっていた。

◇感想、反省...お二方とも、日本語についてしっかりと勉強されていて、あくまで私はサポート役であった。そのため、確認したい問題がこちら側から見ても、難しい文法や単語であったため、説明が困難であった。意味や用法

を理解するために辞書等を用いたため、私自身も日本語について改めて勉強することができた。不手際が多く、学習者を混乱させてしまったことが大きな反省点である。また機会



があるとすれば、その時は、予習する時間が必要であると考えた。用語や用法を調べる時間が無駄であり、会費を払って真剣に取り組んでいられる受講者の方々に失礼にあたると思ったからだ。人に物事を教えることの難しさ、理解してもらうことの喜びを体感できた、貴重な機会であった。

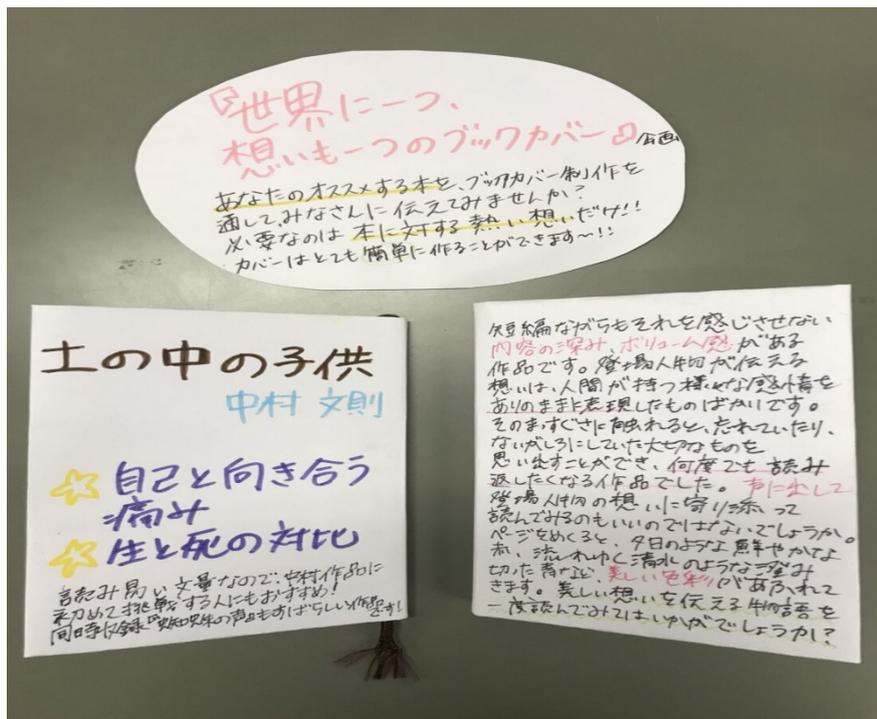
2) 発表企画『世界に一つ、想いも一つのブックカバー』

◇企画発案の経緯：ブックカフェ内の豊富な図書を活用することができないかと考えたため。また、学科の学びや自らの関心のある分野を絡ませて企画を提案することはできないかと考えたため。

◇概要：参加者が自ら勧めたい本を持ち寄り、その紹介文や読んだ当時のエピソードを書き記したブックカバーを制作する。しかしブックカバーの外装はあくまで自由に表現して良いものとし、イラストなどでも可とする。完成後は、参加者同士でその本をプレゼンテーションし合ったり、鑑賞し合う。

◇効果：ブックカバーを制作することを通して、参加者の読書に対する意識を向上させる。また、参加者同士でお互いの勧め本を紹介を行い、参加者間の交流を図る。触れたことのないジャンルの本に目を向け、知識や教養を深めるきっかけになる。イベント開催後も、ブックカフェ内に作品を展示することで、他の目的で施設を利用する人々に対しても、同様の効果を期待することができる。

◇感想：私自身が日本文学を専攻しており、読書活動を好んでいたため、今回このような企画を提出するに至った。「本に関わる企画を行いたい」という大まかなイメージだったのにも関わらず、実際に完成することができた。それが可能になったのは、ブックカフェという「場」、そこの豊富な「資源」、企画を発表する「機会(場)」が備えられているからだとして理解した。自分の興味・関心に基づいて自由に活動することができるブックカフェの利点を、身をもって体感した。今回は、私一人だけで行った試験的な制作であったため、時間も条件も設定せずに作業した。時間を設定せずに進めてしまい、今後の活動に活かすことができなかつたことを反省したい。紹介するテーマやジャンルを設定して行ってもおもしろいのではないかと考えた。



実際に制作したブックカバー

3. 発見、感想

ブックカフェは地域住民の憩いの場と、学習意欲がある人々が活用するための学習施設としての側面を持っている。自らの目的、興味を持つ分野について自由に活動することができる。また、それを表現する「場」が用意されていることが大きな強みであるといえる。実習中は、この特性を身をもって体感した。

実習を通して感じたことは、施設職員と利用者との関係性である。それは決して堅苦しいものではなく、和気あいあいとした空気が流れている印象を受けた。職員との談笑を目的に利用する人も多数存在した。地域の人々との適切な関係作りも、社会教育、地域に関わる仕事を行う者の素養の一つであると感じた。

ブックカフェという仕切りのない開かれた空間と、親しみやすい職員の存在。これらの要因により、地域の人々が多岐に交流することができる。その刺激により、新しい学びや相互発展がなされやすいのではないかと感じた。

4. 疑問、推察、課題提起

(1) 若者利用の視点から

ブックカフェの利用対象は16歳から20代の若者であるとされている。しかし、実習を通して関わった利用者は若者よりも高齢者や未就学児が多い印象を受けた。そのため、若

者支援のための施設であるにも関わらず、広い世代に利用され、全年齢を対象とした講座が多く行われている点を疑問に感じた。施設では、前項で挙げたものの他にも、多世代を対象とした音楽、芸術などの文化に関する講座や、法律や性など個人が関心を持つ分野の、多種多様で魅力的な講座が開かれている。魅力的で多岐に渡る活動が行われているがゆえに、施設の本来期待する利用者層と矛盾が生じている。

まず生涯学習施設を必要とするのは、大きく分けると「学習者」とスタッフや講師を含む「学習支援者」である。人々は、学習者の立場から、大明ひいてはブックカフェに魅力を感じ、活用していることが多い。

大明が本来期待する層である若者の利用増加を念頭に置いたときに、講座の対象者を限定することが挙げられる。しかし、対象を若者に限定して運営していくのは難しいと考える。先ほども述べたように既存の利用者は若者のみならず多世代であり、講座の種類も多種多様である。講座の存在だけがブックカフェの価値ではないが、対象を限定し展開することは、既存の利用者離れを引き起こしかねない。

そこで大明に集うもう一方の立場、学習支援者に焦点を当ててみる。これまで大明が受け入れてきた若者とは、企画などに参加するいわゆる学習者がその割合を多く締めていた。しかし支援者を全く受け入れていないわけではない。むしろ大明では、インターン生を受け入れる取り組みも行っている。また、アルバイトも募集しており、社会教育に関する資格を持ち合わせていなくても、大明ひいてはブックカフェで働くことが可能になる。若者は「学習者」にも「学習支援者」にもなり、活躍することができる可能性を多く秘めた存在なのである。

しかし、それらの制度を活用し、活躍している若者の数は多いわけではない。若者の利用の割合が低い理由として、その認知度の低さがあると考えた。そこで、施設の認知度を上げるために、広報の方法を改めてはどうかと考えた。例えば、若者の普及率が高い SNS の利用や、近隣の学校等の教育施設への告知の増加に努めていくべきだと考えた。既存の企画の告知ももちろんだが、若者が主体となって企画を立案、運営していくことができるということを大々的にアピールしていくことが重要だと考える。若者の自主性を育むことができると同時に、若くしての経験が彼らの糧になるのではないか。

それにより、サードプレイスとしての価値の与え方も変わってくるであろう⁴。地域の住民にとっては「落ち着き、安らげる場所」であるが、居場所を求める若者にとっては「落ち着き、安らげる場所」であり、「自らを表現し、社会的スキルアップを図る場所」でもあるのだ。施設が、若者を休ませる場所というだけではなく、前進させる場所でもある

⁴ サードプレイス…都市生活者には三つの“居場所”が必要だといわれます。第一の場所（ファーストプレイス）が「家」。第二の場所（セカンドプレイス）が「職場」。そしてその二つの中間地点にある第三の場所を「サードプレイス」と呼びます。「日本の人事部 人事辞典」から引用。 <https://jinjibu.jp/keyword/det1/241/>

ということ伝えていくべきだと考える。そうすることで、若者の利用の増加も期待できるのではないだろうか。施設の広報の方法を工夫することで、施設の魅力が若者をはじめ、多くの人々に伝わることであろう。

若者が、施設を利用していくことを通じて、自身の立場を学習者から学習支援者(指導者、調整者など)へと変化させていく。みらい館大明という施設を今後、新しい担い手へと円滑につないでいくことも可能になってくる。

(2) 外国人利用の視点から

前項の通り、豊島区には数多くの外国人が在留している。中でも池袋地域はその割合が顕著であることがわかっている。池袋は、駅北口を中心に反映するチャイナタウンでもあるのだ。外国人が池袋に集まるようになった要因は、それは、池袋周辺に日本語学校が多く存在していたこと、駅の側の地区に老朽化した安価なアパートが多かったこと、繁華街であったため、日本語ほとんど話すことができなくても、飲食店の皿洗いやビルの清掃のアルバイトを見つけやすかったことであるとされている⁵。これらの兆候は、現在も色濃くまちなに残っている。大明を要する要町周辺も、数多くの外国料理店や外国語教室が存在している。池袋において外国人の存在は、切っても切り離せないものであるといえる。

しかし、大明における外国人の利用率は、全体のわずか1%ほどであるという。その理由は、先ほど述べた、外国人が池袋に集まるようになった要因が関係していると考えられる。上記のように、池袋は外国人が住みよいまちづくりがなされている。そのため、地域交流をなさずとも円滑な日常生活を送ることが可能であったのではないだろうか。写真の通り、大通りのあるまちの正面部には、数多くの飲食店、各種教室が存在する。しかし、みらい館大明は以前小学校であったためか、大通りをわき道にそれた住宅街の中にある。まちの発展のための元来の特性の相違が、文化交流を阻む要因であると考えた。

それでは、外国人の利用率を上げるにはどうすればいいだろうか。施設内には様々な講座の案内が貼り出されている。しかし、外国語表記されているものはごくわずかである印象を受けた。いくつもの講座の案内が並べられているのは圧巻だが、その内容を理解することができないと、外国人の方々は、少々萎縮してしまうのではないだろうか。興味のある内容でも、主催者側に一線を引かれていると捉えてしまうこともあるかもしれない。そこで、案内を分野ごとに分けて配置し、各国の言語で表記するなど、外国人も手に取りやすいように工夫してはどうだろうか。また、ブックカフェの蔵書も、外国語表記のものを取り入れたりして、様々な国の人が読書活動、余暇活動がしやすい空間づくりを今以上に進めていくことができると考える。

⁵ 山下清海「世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会ー日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究」明石書店 平成 28(2016)年 3月発行

前項で挙げた日本語サークルはその名の通り外国人が日本語を習うためのプログラムである。月三回行う人気サークルの一つであることがうかがえる。一対一で丁寧な学習を受けられることができ、交流も深まりやすい。これをモデルにして中国語、韓国語などの外国語サークル発足するというのも考えられないだろうか。対話しながら学習するので、外国人の方たちも日本語を学ぶことができる。外国人の方々は講師になることで、やりがい、達成感、使命感が生まれる。また、施設を訪れ日本人を相手として芽生える自己肯定感が、外国人の方々の心を豊かにすることになるのではないだろうか。



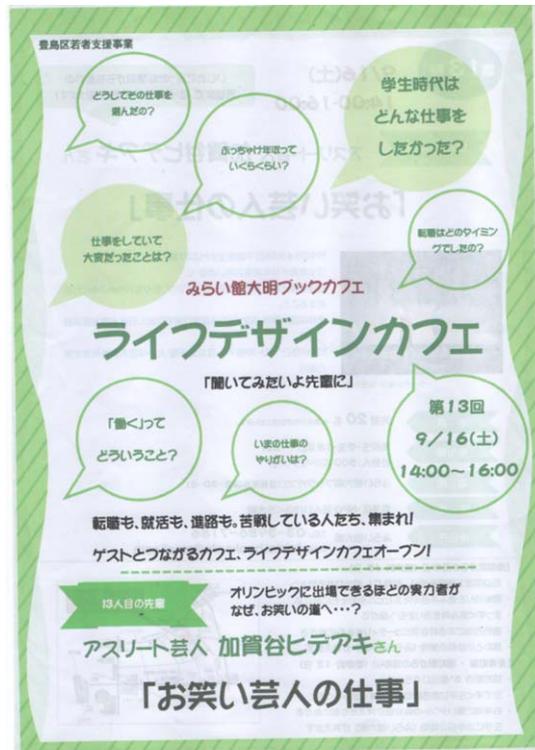
軒を連ねる外国料理店

参考文献、資料

- ・豊島区都市整備部都市計画課「豊島区都市づくりビジョン」平成 27 (2015) 年 3 月発行
- ・新村出「広辞苑 第六版」岩波書店 昭和 30 (1955) 年 5 月初版発行
- ・「日本の人事部 人事辞典」<https://jinjibu.jp/keyword/detl/241/> 2018/03/01
- ・山下清海「世界と日本の移民エスニック集団とホスト社会ー日本社会の多文化化に向けたエスニック・コンフリクト研究」明石書店 平成 28 (2016) 年 3 月発行

若者の夢を広げるブックカフェ —コーディネーターの仕事を通じて—

大正大学文学部歴史学科日本史コース3年 福本麗



【概要】

未来館大明ブックカフェでの実習を通して、コーディネーターの仕事の重要性に触れながら、若者の自己実現を後押しする学びの機能について検討した。

【キーワード】

ブックカフェ、若者支援事業、コーディネーター、居場所作り

1. 実習の目的

ブックカフェのコーディネーター達の仕事から、コーディネーター論・ファシリテーターの機能について触れる。

元々、生涯学習施設の役割及びコーディネーター達の仕事を目にしたことも、あまり関わったこともなかった。普段生活している上では、大きく関わりのあることであるのに、なぜそのような考えに至ってしまったのであろうか。考えてみたら、今まで「生涯学習」に関連したことだと意識せずに生涯学習施設を訪れていただけであった。今回の実習では、先ほど挙げた「コーディネーターの仕事」を見て意識することが目標である。さらに、授業で触れた「コーディネーター論・ファシリテーターの機能」がいかに重要なポイントであるか考えていきたい。

2. 実習の流れ

第1回：施設の概要を理解。

「ヒューマンライブラリー」へ参加

第2回：「ライフデザインカフェ」へ参加及び手伝い

第3回：「オトナ×女子の保健室」会場づくり手伝い

第4回：企画提出

第5回：ブックカフェでの通常業務（受付、本の整理など）

第6回：練り直した企画を再提出

第7回：大明まつり1日目へボランティアとして参加

大まかな流れとして、第1～3回の実習では、ブックカフェでの業務に慣れながら、施設の利用者や概要を理解した。ブックカフェ内で開催されるイベントの準備を手伝い、参加者としてイベントに参加することがメインであった。最初は参加するだけで、「こんなイベントがあるのかあ」とイベントを楽しむだけであった。しかし、準備やイベント終了後、主催者の方とコーディネーターが仲良く、時には真剣に話し合いをしている姿が印象的であった。実習の回を進めるごとにイベントへの熱意を感じるようになった。第4回には企画を考え、提出するという課題があり、第1～3回の実習で学べたことが企画の要となる。第4～6回は、提出した企画の訂正や指示をしてもらい、徐々に形となっていった。さらに、ブックカフェでの通常業務がメインとなり、コーディネーターから利用者さんに声をかける方法などを教わった。そして、第7回は大明まつりにボランティアとして参加させていただいた。

3. 実習内容

(1) 「ミニ ヒューマンライブラリー」(2017. 9. 9)

人を1冊の「本」に見立てて「貸し出し」をする。

お話しをされる方が「本」、参加者である聞き手の方は「読者」、会場は「図書館」、主催者(司会)の方は「司書」となり、相互理解を深めるイベントである。

「本」と「読者」という立ち位置にもきちんと意味がある。あくまでお話しをされる方は「本」、つまり情報を与えるのは「本」だけであるから、「読者」である聞き手は、むやみに自分の意見をしたり、「本」を否定するなどの干渉はしてはいけない。イベント受付時に同意書を書く。なぜなら、イベントのルールをあらかじめ理解できるようにするため、さらに、「本」の方のプライバシーを守るために同意書がある⁶。

・イベントの感想

事前に応募が必要なイベントであったが、副館長の荘司さんと主催者さんのご厚意で「読者」として参加させてもらった。説明を受け、同意書を書き、「読みたい本」を選択し、そのテーブルを予約する。1つのテーブルにつき、「本」の方は1人、「読者」は4、5人ほどに人数を絞っていた。これにより、それぞれのテーブルごとに空間ができ、周りを気にする必要がないので、より「本」と「読者」の距離が近づいていた。さらに、少人数に向けて話すため、「本」の方はあまり緊張せず、自分の言葉で楽しくお話しをされていた。

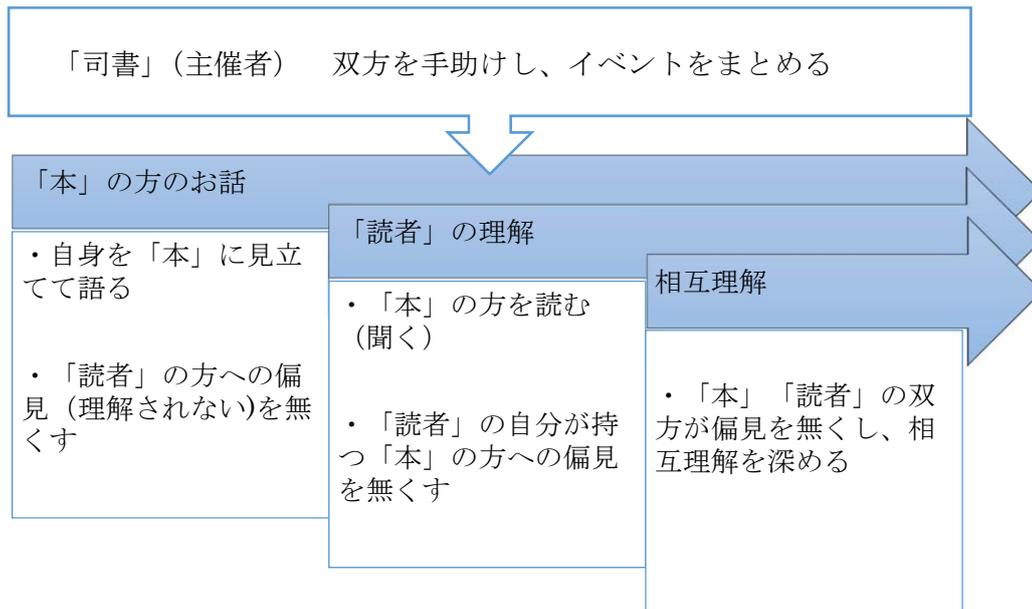
「読者」として3人の「本」の方のお話しを聞き、どの方のお話しも、「面白い!」「時間制限がなければずっと聞いていたい」と感じた。テーブル(空間)が分かれており、それぞれの「本」の方の持つ独自の雰囲気や話し方のおかげで、毎回、その「本」の方の世界観に惹かれていった。主催者さんがタイムキーパーとして5分前告知などをしてくれたおかげで、話がしっかりとまとまっていた。「もっと聞いていたい」と感じていたが、お話しが、時間配分に考慮した構成あるいはまとめであったから、より面白く聞くことができたのではないだろうか。加えて、1人の「本」の方がお話しする時間は15分ほどであった。それにもかかわらず、お話しが進んでいくにつれて、「本」と「読者」の方たちが、相互理解を超えて、親睦を深め仲良くなっていた。イベント終了後は、「本」の方は自身の活動やそれを告知するSNSを「読者」の方に教えたり、「読者」の方は「本」の方へ質問や世間話などをしていた。

対話によって、「本」の方は理解者や繋がりを作るきっかけになり、「読者」の方は、理解はもちろんのこと他者の経験を知り自身の認識を広く持つことができる。イベント終了後も、「本」と「読者」、イベント主催の方は仲良く会話を楽しみ、相互理解を超えた「絆」が作られていた。

⁶今回のイベントにおけるものである。ヒューマンライブラリーの基本において、「司書」の役割を担うイベント主催者が、「読者」の方へイベントのルールを守るように約束し、さらに「本」の方を守る必要がある。

・ヒューマンライブラリーの概要

ヒューマンライブラリーとは、2000年に北欧最大の音楽フェスである「ロスキレ・フェスティバル」で若者たちが始めた「人を貸し出す図書館」が発祥とされている。社会で誤解を受けやすい方々（障害、マイノリティを持つ方々など）への偏見を減らし、相互理解を目的としている。日本では、主に関東圏の大学及び団体によって行われている。



(2) 第13回 ライフデザインカフェ」(2017. 9. 16)

ライフデザインカフェとは、さまざまな職業の方をブックカフェにゲストにお迎えして、お仕事のこと、なぜその職業に就いたのか、お仕事の裏側などのぶっちゃけトークを聞くことできるイベント。基本的に前半はトーク、後半は質問・交流コーナーとなっている。第13回目のゲストは、若手お笑い芸人の方。

・イベント感想

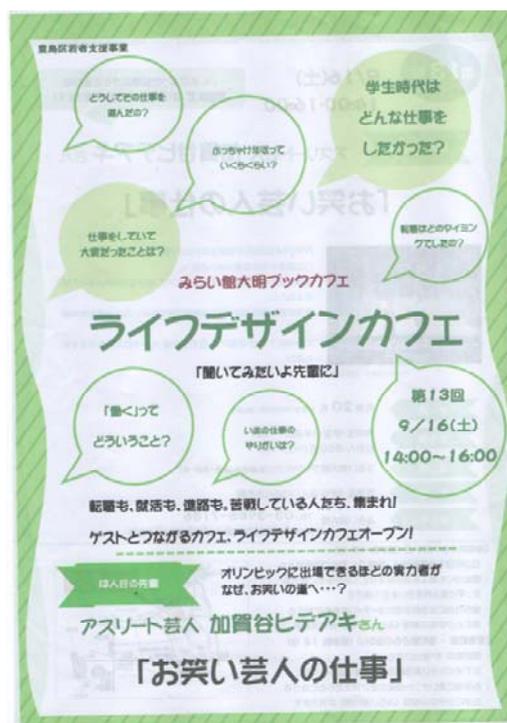
今回はイベント準備からお手伝いさせてもらい、カメラ係を任せてもらった。カメラ係といっても、イベントに参加させてもらいながら、合間に写真を撮っていた。イベント開始時、話を聞くだけの参加ではなく、まさかの参加者も自己紹介をする展開に。その自己紹介も、ゲストのお笑い芸人さんからツッコミをもらうなど、序盤から楽しい雰囲気であった。ゲストと参加者の壁が無くなる、面白い工夫だと感じた。会場はブックカフェであったが、イベントの展開的に、実際に校庭へ移動し、ゲストと参加者が競争をした。事前に校庭の使用許可を取ったり、ゲストの方がどんな方か紹介する映像など、ゲストと主催者の準備が綿密であったことがうかがえる。後半は質問・交流のコーナーとなっていた。

ゲストと参加者の壁を無くすイベント構成のおかげで、いろんな質問が飛び交っていた。イベント終了後であっても、ゲストと参加者は楽しくおしゃべりをし、「頑張ってください」と健闘を祈っていた。参加者がイベントに行ってみようと思った理由はバラバラであったが、全員がとても満足しているようだった。さらに、ゲストの方の人柄の良さや、主催者（司会）との仲の良さが楽しい雰囲気作りに大きく関係しているようだった。

・参加したイベントのチラシ



ミニ ヒューマンライブラリー



ライフデザインカフェ

ブックカフェには、月ごとにイベント情報を載せたお知らせ、開催されるイベントのチラシが置かれている。また、ホームページや Twitter などでも情報を確認することができる。特に Twitter では、イベント時の参加の申し込み、告知、開催の様子など、事細かに発信している。

(3) 企画立案

実習の最終的な段階である。企画について特に指示はなく、「自分のやりたいこと」を企画にするといった内容であった。実習の第四回目にて、一度企画書を提出し、荘司さんに確認してもらった。再度提出となり「もう少し具体的に、例を載せると良くなる。」とアドバイスをいただいた。実習第六回目にて、練り直した企画書を確認してもらい、終了した。

その後、実際に企画をやってみないかとお誘いを受けたが、私の予定が合わず、この企画は実現できていない。この企画の中では、実施期間は12月から4月の間であったので、10月の実習が終わった後、1.2月中に開催が可能だとおっしゃっていた、通常の行政では、企画をやるにしても、次の年度などに回されてしまう。しかし、行政よりも融通が利く大明だからこそ、このようなお誘いをいただけたのである。

1) 企画の内容とやりたいこと

最初に提出した企画書の内容は、新生活を始める大学生・社会人を対象に、大明を利用されている方々を講師して招き、大明周辺地域の説明や生活の知恵を教えてもらうといったものである。地域の方々と話す機会を設け、地域のことを知る。そこから、参加者が次の講師として参加する流れを作り、大明が長く若者の居場所になることを狙いとしている。

この企画を考えた理由は複数ある。ブックカフェが若者支援事業を行っていることから、「若者」を軸にした内容にしたいと考えた。加えて、自分が「やりたいこと」を企画にできるのならば、私自身が感じていた問題を解決してみたかった。私自身の問題であるが、そもそも、私は実習に行くまで大明のことを知らなかった。大学進学を機に、比較的大明に近い地域でひとり暮らしを始めた。さらに思い出していくと、ひとり暮らしをしてから、地域との関わりがめっきり減ってしまった。地域の特徴を知るまで長い時間が経ってしまったり、当日になってイベントの開催を知るなど損ばかりしていた。知っていたとしても、地域との関わりのない自分が、参加してもいいのか気後れした。

大明で実習を進めていく中で、なんでもっと早くに大明を知ることができなかったのか、ひとり暮らしをするときに「居場所」があればと考えさせられた。そのような体験から、ひとり暮らしを迎える若者向けに、地域性と生活の知識を知ることのできるイベントがあればいいなと企画した。

2) 第一回目の企画提出

最初の報告書は、思いつくままに書き出していた。概要と狙いを重点的にまとめれば良いと考えていた。第四回目の実習にて、荘司さんへ企画書を提出した。

提出の際に、予算と開催人数といった基本情報を入れていなかったことに気が付いた。さらに、荘司さんからは、「想像でいいから、具体例を加えてみて」とアドバイスをいただいた。

次回の実習時に練り直したものを再提出となった。

実際に提出した企画書

- ◆企画名（仮）：「生活の先輩から生活の知恵を学ぼう」
- ◆目的：若者の居場所と繋がりを作る。
- ◆場所：みらい館大明ブックカフェ
- ◆対象者：新大学生・新社会人（地方出身・別地域から転居してきた者）
- ◆講師：大明を利用している小学生からお年寄りまで
- ◆開催時期：12月から4月の間、主に冬をメインに行う。
- ◆概要：新生活を始める若者（新大学生・新社会人）に対して、主に講師が大明付近（池袋）を紹介する。講師となる方々は大明を利用している方々を対象に事前に募集し、「生活の知恵を伝授したい人」「実際にひとり暮らしをしている（していた）人」「大明付近で紹介したい場所がある人」など、年齢は設定しない。また参加者から質問に対して講師は回答する。その後、自由に話し合いをしてもらうことで、大明が参加者の「居場所」という意識が芽生えることに繋げる。
- ◆狙い：新入生に対して大学で行われる説明会では、大学生生活や住むところの紹介が行われるが、地域の特徴はあまり説明されない。実際に住んでいる方からのお話を聞くことで知っている場所が増え、不安が解消されるのではないだろうか。また、参加者が次の講師になってくれることも期待したい。

練り直した企画書

- ◆企画名（仮）：「生活の先輩から生活の知恵を学ぼう」「地域の先輩をつくろう」
- ◆目的：若者の居場所と繋がりを作る。
- ◆場所：みらい館大明ブックカフェ
- ◆対象者：新大学生・新社会人（地方出身・別地域から転居してきた者）
先着10人くらい
- ◆講師：大明を利用している小学生からお年寄りまで
- ◆開催時期：12月から4月の間、主に冬をメインに行う。
- ◆費用（参加費）：基本無料か、学生無料にして社会人から500円徴収
- ◆概要：新生活を始める若者（新大学生・新社会人）に対して、主に講師が大明付近（池袋）を紹介する。講師となる方々は大明を利用している方々を対象に事前に募集し、「生活の知恵を伝授したい人」「実際にひとり暮らしをしている（していた）人」「大明付近で紹介したい場所がある人」など、基本は地域の話メインで年齢は設定しない。また参加者から質問に対して講師は回答する。その後、自由に話し合いをしてもらうことで、大明が参加者の「居場所」という意識が芽生えることに繋げる。
- ◆狙い：新入生に対して大学で行われる説明会では、大学生生活や住むところの紹介が行われるが、地域の特徴はあまり説明されない。実際に住んでいる方からのお話を聞くことで知っている場所が増え、不安が解消されるのではないだろうか。また、参加者が次の講師になってくれることも期待したい。
- ◆例：大明付近の飲食店の店主による「大明近辺のおすすめのお店」「新生活を始める人へのアドバイス」「飲食店のアルバイト事情」などを話してもらう。

3) 練り直した企画を再提出

荘司さんからいただいたアドバイスを元に、企画を見つめなおした。具体例を想像したら、不思議と企画の詳細を知ることができた。最初に作成した企画書では、全体的に内容がまとまっていない状態で、自分で考えた企画なのに、「知らなかった」のだ。自分が企画を立案から開催まで、中心になるわけであるから、具体的な見通しができていなければ運営など務まるわけがない。企画自体は、思い切り作り直すのではなく、欠けている部分を足していった。実習中に参加させていただいた「ライフデザインカフェ」を参考に、費用や参加者の人数の設定を付け加えた。

(4) 大明まつり

実習の最終日は、大明まつりにボランティアとして参加した。展示・パフォーマンスによる発表、出店、ゲーム、体験といった、子どもからお年寄りまで楽しむことのできる、さまざまな催しのあるまつりである。私は受付のお手伝いをするようになった。一般参加者と大明で活動している団体さんでそれぞれ受付の方法が違うため、最初は混乱した。さらに、玄関、それに繋がる廊下、扉の開放された教室からたくさんの人の声と音楽が入り混じっているため、常に大声での対応であった。大明まつり両日は、大正大学のスペースがあり、受付の合間に、顔を出すことを了承してくださった。受付と大学のスペースを歩き来しながら、大明まつりの賑わいを楽しんだ。受付の際に、団体の数の多さ、団体に所属している方の元気の良さに終始驚いた。大明まつりは普段活動されている団体さんの発表会のような文化祭と聞いていたので、どの方もやる気がすさまじく、大明まつりを楽しみにされている様子を感じ取れた。一方、一般参加者の方は、「大明」について質問をよくされていた。恥ずかしながら、実習をしていた身であるが、答えられないようなディープな内容が多かった。そして、閉館間際は大声で叫びすぎたせいで、喉が腫れていた。閉館ぎりぎりでも、一般参加の方々は来館してくださり、終始大明まつりにはにぎわっていた。



みらい館大明まつりの案内パンフ

(5) 番外編…副館長 荘司さんの校内講演を聞いて

12月13日に大正大学にて、「生涯学習概論」のゲスト講師として荘司さんが訪れてくださった。大明の概要、地域性、歴史、荘司さんが大明に関わった理由など、実習中には聞くことができなかつたお話をたくさん聞くことができた。そして、実習中に私が気付かなかつたことなどの反省点が多く見つかった。

お話を聞いて感じたのは、荘司さんを含む大明の職員さん達の大明への想いの大きさだ。大明で何か企画をやりたい人がいたら、なぜ大明を使うのか？と大明で開催したい理由を重視するとのことだった。よく大明のことを調べ理解している人が、大明で開催することで、双方にとって、より良いイベントを企画することができる。そのような想いがある中、私の企画は、自分のやりたいことしか考えておらず、大明だからやりたいことにはあまり当てはまらなかつた。大明のことをよく考えた内容にするべきだった。また、改めて感じたのは、実習中における私自身の積極性の低さである。事前に大明での実習は自分のペースややりたい事を見つけ実践していくと言われていたにも関わらず、結局は職員の方々に声をかけてもらってから行動していた。自主性を重んじる自由度の高い実習内容であったが故に、「あの時こうしていれば」といった反省が多い。

4. 考察と提案

(1) コーディネーター達の力

企画の指導を受けていたとき、また、実習中に感じたことがある。企画にアドバイスをしてくださつた荘司さん、ブックカフェのコーディネーター達は、持ち込んだ企画の特徴を壊すことなく、内容を深める術が素晴らしかつた。実習中、「やってみたいことがある」と企画を持ち込んでいる利用者の方々を目にした。何週間もかけて相談を重ねるのかと思いきや、おそらく初回もしくは数回話をされた利用者の方と、開催日時、当日の設備の話がされていた。大明だから、行政よりも、企画が早く実現する点もあるのだろう。しかし、それだけが理由ではなく、コーディネーターは、実際に企画を実現することを前提に考え、利用者さんと共に企画を深堀していく能力があつた。こればかりは経験がものを言うのだろうが、ある程度メソッド化をすれば、企画を持ち込む利用者本人にも、新人のコーディネーター達の教育にも、繋がるのではないだろうか。例えば、持ち込んだ企画を双方が評価できるように、フォーマットを作成してみる。もし、それぞれの評価に大きな違いが見られたら、再度話し合いをする。といった流れを作れないだろうか。

(2) 知名度と立地

私の住んでいる地域から比較的近い場所に、大明は立地しているにも関わらず、実習先が決まるまでその存在を知らなかつた。荘司さんがゲスト講師として招かれた「生涯学習

概論」でも、ほとんどの学生が大明のことを認知していなかった。さらに、駅から離れていること、道が入り組んで複雑であることも指摘されていた。大明は、元小学校の施設を利用しているため、住宅地に囲まれている。昔ながらの住宅地は、道順が入り組んでいて、場所がわかりにくい。これらの点をまとめると、知名度が低く、利用してもらうには立地条件があまりよろしくないということだ。立地に関しては、ホームページにわかりやすい地図と道順が掲載されている。小学校や住宅街といったこのような土地柄であることが、大明の魅力なのだと思う。知名度においては、大明近隣の大学と提携して、利用してくれる学生を増やしてみたらどうか。新入生の多い4月だけでも、ポスター掲載や紹介をさせてもらい、学生に知ってもらう機会を設ける。

(3) 高齢化による利用者の減少

莊司さんが「生涯学習概論」でのゲスト講師として招かれた際に「将来、高齢化による利用団体の減少が考えられる」と聞いた。内閣府で行われた「生涯学習に関する世論調査」(2016)によると、回答者の約44%は高齢者(60~70歳以上の合計)であった。この結果から、生涯学習そのものを認知しているのは高齢者が多いことがうかがえる。また、若者(20~39歳)は約22%であった。このデータから必要なことは、若者とお年寄りの生涯学習に関するニーズが違うということである。若者に関して豊島区と共同で若者支援事業を行っているが、そもそも「生涯学習」や「生涯学習施設」に関する認知度が低いと考えられる。区と共同で行うのであれば、双方が「生涯学習」の認知度を上げる取り組みを行うべきだ。お年寄りも、今後、団体に所属しなくても、参加できるような単発に近い講座を開催することが求められるのではないだろうか。

5. 今後の展望

(1) 大明側…次世代の利用者と指導者を増やす

大明の利用の割合が大きいのは、やはりご高齢の方(団体)である。将来的に、これらの団体は、年齢を理由に活動を辞める或いは縮小する傾向にある。次世代の利用者が増えなければ、大明を利用する団体はいずれなくなってしまう。また、指導者(コーディネーター)の育成も同じように行わなければ、負担は増える一方である。今後は、未来に繋げるために、知名度を上げる取り組みと、指導者の育成プランを構築することが重要である。

(2) 生涯学習施設実習…実習前後の反省を共有

今回は、全員が豊島区内の生涯学習施設で実習をするという初の取り組みであった。同じ豊島区内の施設であっても、施設ごとの特徴がそれぞれ強く、学べるものがたくさんあったはずだ。なぜ、全員が都市部の生涯学習施設で実習だったのか、別々の施設であったのか、考察し合うべきである。私は、施設ごとの特徴が違うことにヒントがあるのではな

いかと考える。施設が特徴的であるがゆえに、生涯学習施設同士の繋がりやの薄さを感じた。生涯学習施設がそれぞれ連携をすれば、大明における知名度問題も解決に近づくのではないだろうか。

大明での実習はとても良い経験となりました。緊張して自分から行動できない私に、優しくアドバイスをしてくれた荘司さん、話しかけてくださったブックカフェのコーディネーターさん達、感謝しても感謝しきれません。この実習での経験を活かせるよう、日々精進していきたいです。ありがとうございました。

Ⅲ 豊島区男女平等推進センター
(エポック 10)

1. 地域概要－豊島区について－

豊島区は、東京23区の西北部に位置し、新宿区や板橋区など計6つの区と隣接している。区の面積は13.01㎢で23区内中18番目の大きさである。人口は約27万7000人で、そのうち約2万9000人が外国人である。また、日本一の人口密度が高い都市でもある。区の産業構造としては、小売業や宿泊・飲食サービス業に従事する人が多く、全体の3分の1に相当する。

区内には、鉄道5社13路線が走っており、交通網がとても発達している都市である。区の中心地である池袋は、有名百貨店やサンシャインシティなどの大型商業施設や娯楽施設のある日本でも有数の歓楽街であるとともに、オフィスビルや大学・予備校、区庁舎などの施設が集まっており、副都心的な役割も持っている。それ以外にも、区の木に指定されているソメイヨシノの発祥の地である駒込や、とげ抜き地蔵やおばあちゃん原宿として知られている巣鴨、鬼子母神や雑司ヶ谷霊園があり都電が走る雑司ヶ谷などの観光地が有名である。区の形が<鳥が羽を広げたかたち>のように見えるため、それにちなんで「としま ななまる」というゆるキャラが存在している。

区の主要課題の一つとして、「国際アート・カルチャー都市」構想がある。これは、安全・安心な空間の中で、誰もが多様な文化を享受し合い、世界中の人々を魅了する賑わいあふれるまちの姿を創造していくことである。文化・国際・空間の3つの戦略のもと、公募区民等からなる「国際アート・カルチャー特命大使」の支援を受けながら、この都市構想の具体化を図っている。「国際アート・カルチャー都市」の実現を通して、都市のイメージを向上させ地域の経済力を高めるとともに、地域への誇りと愛着を醸成し、基本構想で目指す将来像「未来へひびきあう人まちとしま」を確かなものにするによって、持続発展できる都市を形成していくとしている。

もう一つの課題として、平成26年に開催された日本創生会議にて、豊島区は東京23区唯一の「消滅可能性都市」として指摘された。区は個別の問題としてではなく、日本全体の問題として捉え、区の持続的な発展と東京圏の自治体として全国に貢献していくという視点に基づき、積極的な対策を講じている。その対策のひとつとして戦略的に取り組んでいるのが「女性にやさしいまちづくり」の推進である。一人ひとりの多様なライフスタイルを大切にすることを基本コンセプトに、「働く・住む・育む・輝く」の4つのテーマで施策展開を図り、民間との連携を深めながら、区内外へ広く情報発信を強化している。

2. 施設概要：豊島区立男女平等推進センターについて

実習先である「豊島区男女平等推進センター(愛称：エポック10)」は、豊島区の中心地である池袋にあり、豊島区における男女共同参画に関する中心的な役割と機能を持った施設である。

豊島区では、1990年代前後から男女共同参画に関する取り組みを行ってきて、1992年に男女共同参画の拠点施設として男女平等推進センターを開設した。その後、2002年には、男女共同参画都市宣言をして、翌年には男女共同参画推進条例を制定した。1988年に策定された第1次行動計画も現在では第4次となり、男女共同参画社会実現に向けて更なる取り組みへの推進をしている。

豊島区男女平等推進センターは、男女共同参画に関する様々な業務を行っているが、代表的なものとして、学習講座・講演会の開催や啓発誌の発行、女性に関する相談などがある。

学習講座・講演会は、育児や出産、子育てに関することから現代の社会問題、人権問題に関することなど幅広い内容の講座・講演会を開催している。また、これらの事業は、豊島区や男女平等推進センターが主催するもの、男女平等推進センターに登録されている団体やその他団体などとの共催事業として行うもの、区民が企画して講座・講演会を開催するものなど、運営方法も様々である。

女性に関する相談は、人間関係や男女・夫婦・生き方などの悩みや配偶者・パートナーからの暴力など、女性をとりまく様々な問題に対して安心して相談できる場の提供として、一般相談業務や各種専門相談業務などを行っている。

また、一般の人が気軽に訪れることができる情報・交流コーナーがある。男女共同参画に関する本や女性に関する本などが置いてあったり、パソコンなどを利用して情報を集めることができる。また、交流の場として話し合いの場としてや、個人的に利用するなど様々な使い方ができる場所となっている。

【実習報告 豊島区男女平等推進センター（エポック10）】

すべてのひとが暮らしやすいとしまへ

-豊島区立男女平等推進センターの取り組み-

大正大学教育人間学科2年 山田瑞貴



【キーワード】

行政 男女共同参画 女性 人権 性的マイノリティ 学校教育 社会教育

1. 実習の意図と目的

私は、そもそも社会教育・生涯学習に関してはあまり興味がなかった。私は、中学・高校時代から教職というものに憧れていた。教員になることを目指し、大学を選んでいく際においても、教職に関係する学科を選んだ。そして大学入学後すぐに教職課程をとろうと考えていた。1年次の秋に、いよいよ教職などの資格に関するガイダンスが始まったときに、たまたま立ち寄った社会教育主事課程の説明を聞いたときに初めて社会教育・生涯学習というものを知った。いままでの私は、教育というものは学校教育についてしか知らなかった。この時点ではまだこのようなものがあるのだとしか思わなかった。だが、社会教育主事課程の一部が教職課程の履修単位に含まれるということであったので、試しにとってみても良いのかなと思い、受講することにした。講義を受けていくうちに、だんだんと社会教育・生涯学習について興味を持つようになった。自分が志望している教員が関わっている学校教育の他にも様々な教育や学習の展開がなされていることや、学校教育と社会教育などの学校外での教育が密接に関わっていること、それぞれの年齢の段階において教育や学習があり、生涯にわたっての学習が展開していることなどである。それぞれの場所や段階、状況において教育や学習がある中で、学校教育の立場から教育の分野に携わっていかうとしている私にとって、この社会教育・生涯学習というものを学んでいくことは将来役に立つのではないかと思い、生涯学習施設実習に取組もうと考えたのである。

実習を行っていく上では、3つの目的を立てた。まず1つ目に、社会教育・生涯学習についての現状について学ぶという点である。これは、実際に行われている社会教育・生涯学習への取り組みについて関わっていくことにより、どのような状況にあるのかなどを知っていくことが大切だからである。また、実習先が豊島区立の生涯学習関連施設であるため、特に都市部や行政機関という視点も取り入れながら学んでいきたいと思った。2つめは、社会教育・生涯学習と男女共同参画社会との関わりについて学ぶという点である。これは、実習先が男女平等推進センターということで、近年盛んになっている男女共同参画社会への取り組みがどのように展開しているのか、男女共同参画社会と社会教育・生涯学習がどのように関わっているのかなどの点について学んでいきたいと思った。最後3つめは、社会教育・生涯学習や男女共同参画社会の今後について考察していくという点である。これは、実際に実習に参加していったときに、目的と照らし合わせた上で、どのようなことが学べたのか、参加して見えた課題や今後の展望はどのようなものであったかなどを今まで学んできた知識や経験などを使って考えていきたいと思う。以上3つの目的の下に実習活動を行っていった。

2. 実習内容

実習においては、主に2つの活動を行った。1つめは、学習講座への参加と運営の補助である。2つめは人権週間にあわせて行われたパネル展において掲示するパネルの作成である。

(1)「学習講座—一人ひとりがくらしやすいとしまのために—」

今回参加させてもらった講座の内容は、女性の出産や育児・産後の社会復帰に関することや性的マイノリティなどの人権に関わることなど多種多様であった。その中でも、特に印象に残っている2つの講座について紹介していく。

1つめは、「わくわくカフェ～LGBTと恋～」である。この講座は、男女平等推進センターとNPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワークとの共催事業で、LGBTや性的マイノリティに関しての啓発を目的として行われた。私は、会場設営と運営の補助を行った。また、実際に講座にも参加させてもらった。講座の流れとしては、前半にゲスト講師の方のトークセッションを行い、後半にグループ別の意見交流が行われた。講座の雰囲気としては、あまり堅苦しいものではなく、和やかであったように感じた。参加者も幅広い年代・性別の人がいたので、多様な意見が出ていた。私自身LGBTに関してあまり詳しくなかったので、性的マイノリティの人とはどのような人であるのかを知ることができたし、いわゆる一般的な性的指向・性自認の人と大して変わりはないことなどがわかったので、参加できたことは良かったと感じた。

2つめは、「特別講演会 考えてみよう、彼女たちのこと。～JKビジネスの実態と背景から～」である。この講座は、豊島区女性に対する暴力をなくす運動の特別講演会で、社会問題となっている女子高生などによる男性へのサービス、いわゆる「JKビジネス」に関する内容の講演会であった。講師として、この問題に多く関わっているNPO法人の方に来てもらった。私は、会場設営と会場内誘導などの運営補助を行った。そして、実際に講演会の内容を聞くことができた。講師の方の紹介やNPO法人の概要について説明した後、実際に関わってきた子どもたちや女性たちから見えてきた、JKビジネスやそれらに関することについての実態や起こってくる背景、それらへの対応や支援などについて講演してくれた。今回の講演を通して、現代の日本が抱える社会的問題（貧困や家族形態など）を知ることができた。また、教育というものが子どもたちやそれ以外の人たちにできることとは何かということを考える機会にもなった。

(2)「人権週間パネル展示-性の概念を超えた関わり合い-」

次に、人権週間にあわせて行われたパネル展において掲示するパネルの作成に携わったことについてである。これは、豊島区総務課が人権週間にあわせて行ったパネル展において、男女平等推進センターからも企画展示を行った際に、その中で展示するパネルについての作成をさせてもらった。内容は、10月15日に行われた学習講座「わくわくカフェ～LGBTと恋～」(共催事業)の紹介パネルとLGBTに関する用語の解説パネルの2枚の原稿を作成するものであった。紹介パネルは、事業の紹介と共に、主催者の意図や参加者の感想なども加えた。用語解説のパネルでは、実際に公的機関などの説明文を引用する形で記載していった。作成していくにあたって、まず講座を主催した団体の人と打ち合わせを行ったり、必要資料を集めて・まとめる作業を行った。そしてそれらの資料などをもとに、実際に展示していくパネルの作成に取りかかった。作成で大変であったことは、説明文の内容やデザイン・色の使い方である。多くの人がわかりやすい説明であることや言葉の言い回しやその言葉の使い方が正しいかどうかなどを意識しながら文章を作っていく点や写真や図・文章の配置や色の使い方、配色の構成など、それぞれの人の見え方にも注意していく点、その他にも様々な点において注意して作っていくことは、とても根気のいる作業であった。作成段階において、担当の職員の人にもいろいろとアドバイスをもらいながら作っていき、ある程度形を作った上で、最後は、担当の人にきちんと展示できるように修正してもらって完成した。その後、実際にパネル展に足を運んでみた。その時観客側としてみたときに、作成時において受けたアドバイスなどを思いだし、改めて、相手を意識した物作りが大切であると考えた。

※実習日程表

回数：実習日	実習内容
1回目：10/7	実習先・実習内容の説明と区民企画講座の設営準備・見学
2回目：10/15	共催事業の打ち合わせと設営準備・運営・見学
3回目：10/18	育児復帰セミナーの設営準備・見学とパネル展の準備
4回目：11/10	今後の活動についての打ち合わせとパネル展の準備
5回目：11/11	パネル展の準備とエポック10フェスタ実行委員会の設営準備・見学
6回目：11/17	パネル展の準備
7回目：11/18	パネル展の準備

8回目：11/24	パネル展の準備
9回目：11/25	パネル展の準備と外部での共催事業の設営準備・運営・見学
10回目：12/8	豊島区女性に対する暴力をなくす運動特別講演会の設営準備・運営・見学
11回目：12/12	エポック10シネマの設営準備・運営・見学

3. 実習活動に対する感想・考察

(1) 実習活動の感想や課題点

実習を通しての感想や課題点としては、まず1つ目として、断片的な活動しか出来なかったために、施設に関して深く知ることが出来なかった点である。これは、私が大学の講義との兼ね合いや、施設側との予定が合わなかったりしたためである。本来ならば、長期休暇等において継続的に実習をしていければ良かったのだが、出来なかったのが残念であった。2つ目としては、私が受け身的な取り組みであった点である。これは、指示があるまでどうして良いか分からずいたり、与えられた仕事をこなしていくような活動でいたため、もっと積極的に施設の方と話をしたり、何かやることはないか聞いていければ良かったと感じた。3つ目としては、学習講座や事業等に参加できたことにより、実際の行政機関の仕事の内容や難しさを知ることが出来た。公に関わる仕事は、何をやっているのかわかりにくいところがあったため、今回の実習を通して行政の立場として動いていくときや地域住民の支えとして動くとき、地域住民とともに事業をしていくなど場面や内容に応じて活動していくことを知った。また、難しさというものも感じた。大学において書くようなレポートなどと違って、公的機関の出す文書や内容を作成していくことはとても難しいことであった。また、来訪者への対応の仕方や言葉遣いなど一つ一つ気にかけていくことがあると感じた。4つ目に、人とのコミュニケーションをうまくとれなかったことである。コミュニケーション能力というのはどこの場においても必要なものである。今回の実習においても、男女平等推進センターの実習担当者やその他の職員、講座などを一緒に運営していく人や講座の参加者と話す機会はたくさんあったが、自分の伝えたいことをうまく表現できていなかった。相手に伝わらなかったり、本来の意図とは違うとらえ方を相手にさせてしまったのでは、共に活動していく上でとても支障が出てくるので、改善すべき点である。5つ目に、実習を行うに際して必要なことが足りなかったという点である。今回の実習活動を通して多くのことを学ぶことができた。豊島区や男女平等推進センターにおける男女共同参画への取り組みやそれに関わる多くの人の存在などであるが、それら

得た経験や知識をより深いものとして自分自身に取り込んでいくためには、前提となる知識が必要である。しかし、それらが足りなかったために、深い学びにつながらなかった点は反省する点であり、今後の学びにおける一つの課題であるといえる。

(2) 実習を通して感じたこと

実習を通して感じたことや考えたことがいくつかあった。まず1つ目に、男性や子どもの利用者が少ないように感じられた。今回紹介していないが、シネマ上映会などや子育てに関する内容においては、男性の参加者もいたのだが、実際に、男女平等推進センターで作業をしたり、講座・講演会に参加したときの多くが女性の参加者であった。2つ目に、学習講座・講演会の内容が女性向けであることが多かった点である。私自身の中に、固定的な性別役割分担意識があるのかも知れないが、そのように感じたため、もっと男性や子ども（青年期など）を対象とした講座・講演会などの開催をした方が良いのにと考えていた。3つめは、男女平等推進センターの職員についてである。イメージ的に、行政の現場というのは、男性ばかりが多いものだと思っていたのだが、比較的女性職員の割合が多かった。男性職員の人もいたのでそれぞれの立場に沿って対応できる点が良いなと感じた。

4. 残された課題と今後の活動について

今後の活動について見えてくることは、今回の社会教育・生涯学習の施設実習を自身の学習分野にどのように生かしていけるかについてである。私の学習分野は、学校教育や教師に関することである。現在の学校教育においては、地域や社会との連携をとりながら、よりよい学校運営をしていこうとしている。そうした中、今回の実習経験は今後の取り組みや学びに大いに役立つといえる。実際に地域や社会における活動、特に男女共同参画や社会教育・生涯学習の取り組みを知ることができた。今度は、学校現場から関わっていくときにどうしていけばよいかについて考えていくことである。そのためには、まず自分に足りないと感じた知識等を学び、その上で、その他に、実習を通して感じたことの1つに、男性や子どもの利用者が少ない傾向にあるという点があった。この点については、男女平等推進センターの事業概要のデータやとしま男女共同参画推進プランにおける現状と課題で取り上げているところでもある。私が実習中に開催された学習講座・講演会の内容は女性に関係するものがとても多かった。このことから、今後、男性や子どもたちの利用が増えるような取り組みが必要であるといえる。私は、教職に関することを学んでいる身とし

て、もっと子どもたちへのアプローチが大切であると考え。将来大人になり、社会へ出て行く子どもたちに対して早いうちからの参画させていくことにより、男女共同参画社会の実現により近づいていくと考えられる。しかし、これらを学校だけで行うことは不可能であるため、学校と行政が連携して取り組んでいくことが大切である。その中心的な立場として男女平等推進センターが担っていけるのではないかと考える。事業概要によると、昨年度において区内中学校を対象とした「デートDV予防教室」の実施がなされたという。これらの事業をもっと拡大して、様々な男女共同参画に関する講座・講演会を開くことによって、子どもたちが男女共同参画を身近に感じられるようになっていくと考える。

最後に、本実習においてお世話になりました「豊島区男女平等推進センター」の高島係長や長末様をはじめ、多くの職員から丁寧なご指導やアドバイスをいただきました。また、生涯学習施設実習担当者の出川先生にもたくさんのご指導ご鞭撻のほどいただきました。お世話になりました皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。

○参考資料一覧・付録編

- ・豊島区男女平等推進センター 「としま男女平等推進プラン」 平成 28 年 12 月発行
- ・豊島区男女平等推進センター 「男女共同参画社会の実現に向けて 事業概要」

平成 29 年 4 月発行

- ・豊島区公式ホームページ（男女共同参画）

<http://www.city.toshima.lg.jp/kuse/danjo/index.html>

- ・公益財団法人特別区協議会ホームページ（特別区の紹介 豊島区）

<https://www.tokyo-23city.or.jp/base/intro/about23ku.html#link18>

- ・特別区職員研修所編 「特別区職員ハンドブック 2017」平成 29 年 3 月発行



写真1 豊島区立男女平等推進センターの案内図



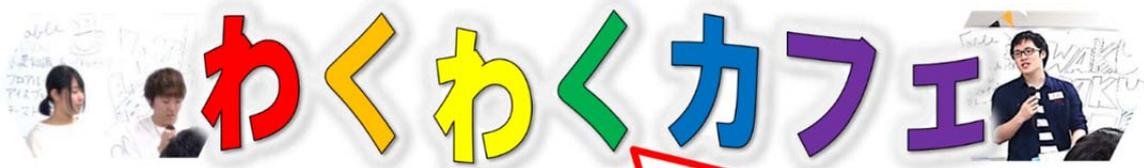
写真2 豊島区立男女平等推進センターの風景（情報交流コーナー）



写真3 パープルリボンキャンペーン（女性に対する暴力をなくす運動）



写真4・5 学習講座の様子（共済事業：わくわくカフェ～LGBTと恋～より）



日時：平成29年10月15日（日）
 場所：豊島区男女平等推進センター
 主催者：NPO法人豊島子ども
 WAKUWAKUネットワーク / 豊島区
 ゲスト講師：性性堂堂（せいせいどうどう）

『わくわくカフェってなに？』
 豊島区で活動する地域団体や区民、学生が共に「恋」について語り合う会を実施。中学生から40～50代の幅広い層が参加し、性の多様性に関する基礎知識を学び、交流後、メッセージパネルを作成しました。

企画者から...
 遠くの誰か、ネット上の誰かではない、豊島区にいる身近な人で応援してくれる人がいるってことを実感できる、その人たちと話をすることで安心できる会にしたいという想いがあり、学生や若い世代の方と一緒に企画・運営を行いました。



参加者の感想 ・ LGBTというキーワードがとても印象的だった
 ・ どんな「好き」も否定してはいけないし、否定されるべきではない

性性堂堂とは？
 セクシュアリティの違うもの同士が素朴な疑問をぶつけあう！ これまでにない、性トークおしゃべり集団



・ 人権週間パネル展にて展示されたパネル（性的マイノリティに関する学習講座の紹介パネル）

BT

・ **LGBTの4つの言葉を組み合わせたもので、セクシュアルマイノリティの総称。LGBTの他に、AセクシュアルやXジェンダーなども含め、LGBTsと表すこともある。**

・ 人権週間パネル展にて展示されたパネル（用語解説を一部抜粋したもの）

IV. 研究ノート

【研究ノート1】

新潟県阿賀町室谷地区

「室谷ふるさとキャンプ」の試行実践

—青年会・高校生・都市部大学生の協働による新たなムラづくりへの挑戦—

大正大学エンロールメント・マネジメント研究所、地域創生学部 出川真也

東京農業大学地域環境課学部 地域デザイン研究室



【概要】

当研究は平成29年度新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業の助成支援を受けて実施されたものがある。青年会・高校生・大学生協働による地域学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」試行を実施。試行結果を踏まえて人材育成モデルの構想及び、内外協働の学習交流産業へ波及展開するための方策を考案。

中間報告での指摘事項を踏まえて、地元住民ニーズの確認・検討を再度実施。①外部との交流、②地域若者担い手育成（直接的には青年会活動の担い手形成）の2点に絞り込み、当地域の自然・文化的資源を活用しながら相乗的に実施効果を高めていく戦略を検討した。

【キーワード】

地域青年会 交流 担い手（人材）育成 集落活性化

1. はじめに—本事業の概要—

新潟県阿賀町室谷地区は、御神楽岳入口に位置しています。周りを山々に囲まれ、町内でもトップクラスの豪雪地帯で、集落内の紫光山洞雲寺は、この地の教育の源であったと伝えられています。室谷区に暮らす住民の絆は強く、季節ごとの行事など、区全体で協力しあいながら集落の発展と活性化に努力しています。

近年、過疎化高齢化によって集落活動が減退しているといった課題があげられています。山村地域ならではの自然・文化的資源を十分に管理・活用することができておらず、特に次世代の人材育成・継承といった点で大きな懸念材料を抱えています。一方で若手構成員を中心にした青年会活動が今も存続しており、近年新たな地区行事を企画・実施するなど集落活性化に向けた努力を続けています。

地区では、外との交流による青年会活動の活性化を基軸にしなが、地区全体の活性化を図りたい。地域の日常の暮らしの中にある魅力（ひと・もの・こと）を基盤としなが、外部の若者や青年会など地域の若者が中心となった集落活動を促進させたい。若者たちの取り組みを契機にして、地域人材育成と集落の自然・文化資源の保全を実現し、若者たちが暮らし続けていけるような地域ならではの生業を再構築していくことが必要であると考えています。

こうした室谷地区の想いを受けて、平成 28 年度及び平成 29 年度の「新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業」を活用した取り組みを大正大学と東京農業大学が連携して実施してきました。取組みの基軸として、室谷地区の若手地域組織である青年会を基軸としなが、集落全体の活性化を図るために、活用可能な地域資源（ひと・もの・こと）の掘り起こしと活用策の検討を行いました。また、これらの資源を基盤とした人材育成（担い手育成）・交流活動の相乗的活性化策について、大学はもとより高校などの地域教育機関との連携を視野に入れた仕組みづくりに取り組みました。

本報告書では、こうした 2 年間にわたる取組を概説するとともに、特に 29 年度実施活動を中心にしなが、今後の青年会を軸とした若者と地域の活性化のための展望について、取り組み成果と合わせて報告します。



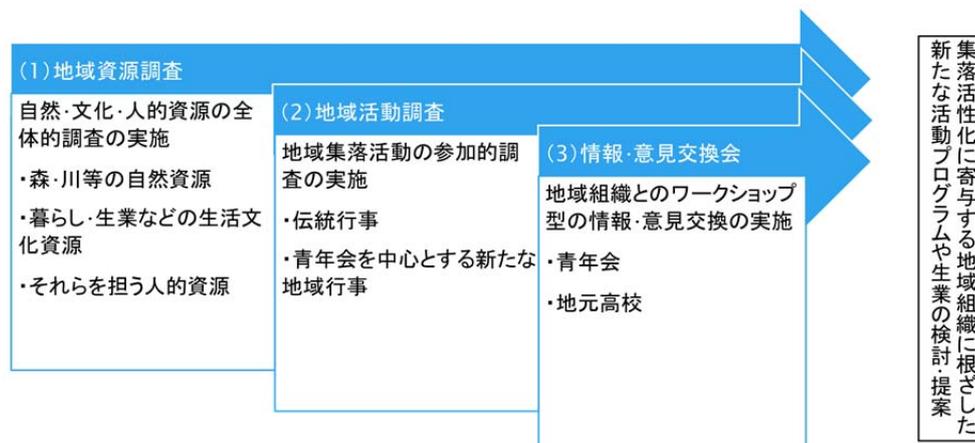
2. 背景と目的

(1) 背景—平成 28 年度調査の概要と結果—

平成 28 年度は、青年会の活動に参加しながら、集落の概況を把握し、地域資源の掘り起こしを行うことを中心とした調査活動を実施した。特に次の 2 点に留意した取り組みを行った。

- ・青年会がチャレンジ素養としていることに寄り添い、構成メンバーと協働しながら研究調査活動を実施する。
- ・青年会・若手世代層が軸となって地域活性化に寄与するための集落の自然・文化的資源に根差した新たな活動プログラムや生業を提案する。

実施に際しては、1) 地域資源調査、2) 地域活動調査、3) 意見交換会のプログラムを設定し、段階的に内容を深めながら次年度の活動内容につながる提案を導出させるものとした。



各取組項目の概要は以下のとおり。

1) 地域資源調査

地域集落及び周辺環境を住民と共にまわり調べる「地元学」を実施。山林、川、食文化、住まい・暮らし、道具などの地域資源の掘り起こしを行った。

2) 地域活動調査

青年会が主宰する集落行事に参加・体験しながら取組の実態を調査した。以下の行事に参加した。

- ・室谷祭礼伝統行事神輿担ぎ、その後のお楽しみ会開催のお手伝い
- ・おもっしえぞ祭り（旧神谷分校学芸会）開催のお手伝い・見学取材・出演

3) 意見交換会

関係者と以下のとおり意見交換会を実施した。

- ・青年会をはじめとする地域住民との情報・意見交換会（計 5 回）
- ・阿賀黎明高校・黎明学舎との情報交換・意見交換等（計 3 回）
- ・阿賀黎明高等学校生徒とのワークショップ（1 回）

平成 28 年度の調査研究活動の結果、青年会をはじめ地域組織にはふるさと自然・文化を基盤として様々な学び（森、川、食、暮らし、産業、交流、環境、国際など）を促進する「教育力」が存在することが明らかになった。その一方で、地域資源が未活用であり、これら地域資源を担い手育成・町外若者の誘引のために活用していく新たな方策が求められていることが浮き彫りになった。他方で、青年会をはじめとする室谷区地域団体及び阿賀黎明高校、阿賀黎明学舎において、ふるさと資源を活かした担い手育成、教育プログラムの構築に、ニーズがあると言える。

以上を踏まえて、青年会を軸とした教育・交流産業モデルとして、室谷の資源を活用して高校生と共に行う地域学習プログラム「ふるさと学習キャンプ」（仮称）の試行実践を提案した。

（2）今年度事業の目的と概要

平成 28 年度事業提案を受けて、集落の地域資源活用を図りながら、担い手育成と外部交流を相乗的に促進することを目的に以下の取り組みを行う。

- 1) 前年度事業において提案した、室谷区青年会をコーディネーターとして地域内外の高校生・大学生が協働する地域資源活用学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」を試行する。
- 2) 試行結果を踏まえて、地元若者組織（青年会）・高校生・都市大学生が協働して町の人材育成と活性化に取り組むための教育プログラムモデルを構築する。
- 3) 構築したモデルを活用した内 - 外協働の学習・交流産業へと波及展開するための方策を考案する。

以上により、青年会等の地域の若手担い手育成・誘引と交流による地域活性化を相乗的に向上させる地域生業の実現を目指していく。

3. 事業内容

(1) 集落の概要と課題

新潟県阿賀町室谷地区は人口：115人、世帯数：29世帯、高齢化率：35.6%である。

青年会をはじめ地域組織に様々な学びを促進する「教育力」が存在する一方、地域資源の中には未活用のもも多く、担い手育成・町外若者の誘引に活用していく新たな方策が求められている。また、町全体でも、地元教育機関において、地域の資源を活かした教育プログラムが模索されている現状がある。

地域の多様な資源を活用しながら、担い手人材育成と外部交流を相乗的に促進させていくことが課題となっている。

(2) 調査研究の概要

1) 室谷区青年会・地域内外の高校生・大学生が協働する地域資源活用学習・実践プログラム「室谷ふるさとづくりキャンプ」を試行する。

2) 1) を踏まえて青年会・高校生・都市大学生が協働して町の人材育成と活性化に取組むためのサービスラーニング・キャリア教育プログラムモデルを構築する。

3) 構築したモデルをふるさと納税制度への活用など、内-外協働の学習・交流産業へと波及展開するための方策を考案する。

(3) 調査研究の日程

①6月	②8月7～10日	③9月7～10日	④9月10日
「室谷ふるさとづくりキャンプ」(自然活用編)の企画調整会議	青年会、地元高校生、大学生の協働による「室谷ふるさとづくりキャンプ」(自然活用編)実施	「室谷ふるさとづくりキャンプ」(伝統文化編)の企画調整会議	伝統文化編として、伝統行事(室谷祭礼)を活用した体験と地域貢献プログラムの試行実践
⑤9月7～10日	⑥10月15日	⑦10～2月	⑧2月
「室谷ふるさとづくりキャンプ」(交流イベント編)の企画調整会議	交流イベント編として、室谷集落住民と協働したイベント・交流プログラムの試行実践	地域人材育成・交流プログラムモデルの構築検討会	構築モデルを活かした地域づくり波及展開策の検討会・報告書取りまとめ

(4) 実施体制・参加学生

1) 実施ゼミの概要

①東京農業大学地域環境科学部 宮林ゼミ (地域デザイン学研究室)

「地域の暮らしと文化」を実際に現地に繰り返し赴きながら研究を進める。学校での学びと地域の資源(自然、風景(景観)、建築物、人の暮らし、知恵、ワザ等)を結びつけ、地域の発展、振興とは何か?を探求する。

②多摩川源流大学プロジェクト

「地域で本物を学ぶ」をキーワードに学生が農村に赴き、農業・林業・文化の体験実習をおこなうプロジェクト。実習講師を住民に依頼することで地域人材の活用と実習内容のバリエーションを増やす。また、住民間(世代間)と都市部・地域のコミュニケーションのつなぎ役にも役立つ。

③大正大学地域創生学部 出川ゼミ

「地域創生の教育学」を掲げ、子どもから高齢者まで幅広い年齢層を対象にして地域づくりのための社会教育・生涯学習活動を研究。地域価値の再発見、地域に根ざした教育、学習成果を活用した暮らしや仕事の変革と新たな生業の創出、コミュニティリーダーやコーディネーター人材の育成等。都市との連携協働を見据えながら、農山漁村をフィールドにして研究と実践。

2) 参加学生・教員

杉野卓也 (東京農業大学学術研究員)

出川真也 (大正大学専任講師)

井口春海 (東京農業大学2年)

新井 朋 (東京農業大学2年)

高橋咲紀 (大正大学4年)

本多 龍 (大正大学3年)

堤 佐衣 (大正大学3年)

福本 麗 (大正大学3年)

平良菜月 (大正大学2年)

山田瑞貴 (大正大学2年)

3) 受け入れ集落・団体

新潟県阿賀町室谷地区・室谷青年会、阿賀町役場、阿賀町教育委員会、阿賀黎明高等学校

4. 実施経緯

現地訪問による実践活動の実施経緯の詳細は次の通りである。

(1) 8月：阿賀町室谷ふるさとづくりキャンプー自然活用編ー

1) 趣旨

青年会が軸とした地域担い手育成と町内外の若者交流を相乗的に促進し、新たなプログラム開発や産品開発を実現することを目的に、青年会、地元高校生、都市部大学生（東京農業大学・大正大学）により、地域住民と共に地域資源を用いた学習・実践プログラムを実施します。

・参加者

出川真也（大正大学専任講師）
高橋咲紀（大正大学4年）
堤 佐衣（大正大学3年）
大宮晴香（大正大学3年）
福本 麗（大正大学3年）
山田瑞貴（大正大学2年）
佐藤修子阿賀黎明高等学校教諭
他生徒4名



2) 実施内容

①事業目的

- ・担い手交流（青年会の担い手育成効果）
- ・地域資源を用いた新たな「プログラム開発」
- ・地域資源を用いた新たな「産品開発」（食・モノ）

②本活動における実施内容

事業到達目標達成のため青年会・高校生・大学生で次の内容による地域学習キャンプを実施します。

- ・地域調査（行事・方言・民話民謡／8日午後、農業・里山・川漁等／9日早朝）
- ・郷土料理・創作料理作り検討
- ・青年会とのイベント企画検討会議

3) 全体タイムスケジュール

大学生滞在期間：8月7日9：30～8月10日12：00

キャンプ実践（高校生含む）期間：8月8～9日

日時	内容	備考
8月6日（日）		
22：30	池袋駅東口新潟行き高速バス乗り場集合	
23：00	出発	
8月7日（月）		
9：30	大学生 阿賀町着	役場車両（8名乗）
10：30	役場・教育委員会 訪問 あいさつ 阿賀黎明高校訪問・打合せ・高校生との交流	
15：00	室谷区へ移動（途中買出し）	役場車両（8名乗）
19：00	青年会との事前打合せ	かやぶきの里泊9名
8月8日（火）		
11：00	阿賀黎明高校集合・移動 4～8名想定 （高校→室谷・かやぶきの里）	役場車両（8名乗）
12：00	（キャンプ開始） 昼食・かやぶきの里	大学生側で準備
13：00	地域調査 室谷区の詳しい方を訪問し、聞き取り・見学 ①行事・歴史等 ②方言・民話・民謡等 ③郷土料理・食文化 ④地形・地質・防災 ※4グループに分かれて実施。グループ構成1グループ当たり大学生2名・高校生2名・地元案内人1～2名の構成を予定。	分野ごと詳しい住民を紹介していただき、お宅訪問する
16：00	郷土料理開発検討	
19：00	試食検討会 青年会との企画会議	

21:00	1日目終了予定	かやぶきの里泊 14～18名
8月9日(水)		
4:30	野外調査・体験(農作業・川漁等)	
8:00	朝食	
9:00	調査データのとりまとめと振り返り	
11:30	キャンプ終了(高校生移動)	役場車両(8名乗)
昼～午後	大学生 フリータイム(川遊び等)	
夜	青年会と大学生反省会	
8月10日(木)		
9:00	後片付け後出発 (9:31 津川駅発で帰路)	役場車両(8名乗)

4) 事前準備事項等

①大学側準備事項

- ・現地活動機材・装備の準備
- ・地域調査資料の収集と当日調査に向けての検討

②高校生側準備事項

- ・初日(8月7日)
 - 10:30～関係職員・生徒との打合せ
 - 13:00～高校生との交流会(情報交換会)等の内容準備
- ・8-9日のキャンプ当日、先生・高校生含め5名参加
- ・調査4分野に関する自分の身近な地域の情報収集と取りまとめ(質問様式等提示)
- ・1泊2日の宿泊準備(着替え、洗面、常備薬、帽子、野外服装等)

③青年会側準備事項

- ・8月7日午後(13:00～16:00)分野別調査に対応いただける住民
 - ①行事・歴史等に詳しい方
 - ②方言・民話・民謡等に詳しい方
 - ③郷土料理・食文化に詳しい方(16:00～の郷土料理指導にも対応)
 - ④地形・地質・防災に詳しい方

・ 8月8日早朝（4：30～7：00）野外調査に対応いただける住民

①畑・農業作業・収穫指導等に詳しい方

②川漁に詳しい方

（2）9月：阿賀町室谷ふるさとづくりキャンプー文化伝統編1ー

1) 趣旨

青年会が軸とした地域担い手育成と町内外の若者交流を相乗的に促進し、新たなプログラム開発や産品開発を実現することを目的に、青年会、地元高校生、都市部大学生（東京農業大学・大正大学）により、地域住民と共に地域資源を用いた学習・実践プログラムを実施します。



2) 前回8月の調査・検討の引継ぎ

①9月9日のお祭行事において、引き続き高校生と絡んだプログラムを企画

内容として、8月調査で取り上げた地元独自のジャガイモ料理「プツン芋」（添付ファイル参照）を串刺し料理にして、高校生と大学生で販売提供する方向で検討中。

②廃分校舎の利活用について

高校生・佐藤先生ともに関心。地元高校生が行う合宿（勉強合宿、生徒会合宿等があるとのこと）での利活用について検討可能性あり。（地域学プログラムと合わせた地元高校カリキュラムメニューへの発展）

3) 日程・場所 9月7日（木）ー10日（日） 集合：大宮駅新幹線南口 8：30

新潟県阿賀町室谷地区（宿泊先・岩堂かやぶきの里）

4) 参加メンバー

・農大側4名

新井 朋（女性）東京農業大学2年

井口晴海（女性）東京農業大学2年

川元愛生（女性）東京農業大学2年

杉野卓也 東京農業大学学術研究員

・大正大学側（5名）

平良菜月（女性）人間科学科 2 年

高橋咲紀（女性）歴史学科 4 年

佐藤夏穂（女性）歴史学科 3 年

本多 龍（男性）臨床心理学科 3 年

出川真也（窓口教員）大正大学専任講師

5) 実施内容

①担い手交流（青年会の担い手育成効果）

集落・青年会行事（室谷祭礼）の参加と貢献

②地域資源を用いた新たな「プログラム開発」

室谷祭礼のお手伝いとお楽しみ会の実施

高校生・青年会とのプログラム企画会議

③地域資源を用いた新たな「産品開発」

（食・モノ）

室谷祭礼における地域食材を用いたイベン

ト実施。高校生・青年会との産品企画会議

6) 詳細日程

9月7日（木）

8：30 大宮駅新幹線南口集合

12：32 津川着

14：00 役場打合せ（中間報告内容、来年度以降構想）

15：30 高校打合せ（中間報告内容、分校舎の活用方法、来年度以降構想）

16：30 買出し・移動

入浴・夕食

19：00 青年会打合せ（中間報告内容、役場・高校情報共有、又は祭り準備手伝い）

泊：かやぶきの里（0254-95-2211）

9月8日（金）

AM プッツン芋 お母さん方と打合せ仕込み準備等

PM 祭準備手伝い等



泊：かやぶきの里

9月9日（土）

AM 祭 神輿担ぎ（男性）、プッツン芋準備（女性）

PM お楽しみ会 プッツン芋販売実践

夜 反省会

泊：かやぶきの里

9月10日（日）

AM ふり返り、片付け、ご挨拶など

昼頃 帰路

12:32 津川発 帰路

（3）10月：阿賀町室谷ふるさとづくりキャンペー文化伝統編2ー

1) 趣旨

青年会が軸とした地域担い手育成と町内外の若者交流を相乗的に促進し、新たなプログラム開発や産品開発を実現することを目的に、青年会、地元高校生、都市部大学生（東京農業大学・大正大学）により、地域住民と共に地域資源を用いた学習・実践プログラムを実施します。

2) 日程・場所

・10月14日（土）—15日（日）・新潟県阿賀町室谷地区

3) 参加メンバー

①東京農業大学

井口晴海（女性）東京農業大学2年

②大正大学

高橋咲紀（女性）歴史学科4年

高橋佑里（女性）歴史学科4年

本多 龍（男性）臨床心理学科3年

出川真也大正大学専任講師

4) タイムスケジュール

・10月14日（土）

13:00 かやぶきの里着

・いも調達・下ごしらえ・ポップ作り・会場確認等



17:00 入浴 (みかぐら荘)

19:00・青年会との打合せ・リハーサル等

・10月15日

終日:おもっしええぞ祭参加・ぷつつん芋提供

17:00 室谷区発・帰路

(4) 2月:地域との意見交換会

1) 期間 2018年2月15日—18日

2) 参加メンバー

杉野卓也 (東京農業大学学術研究員)

出川真也 (大正大学専任講師)

高橋咲紀 (大正大学4年)

本多 龍 (大正大学3年)

平良菜月 (大正大学2年)

3) 主な取組み内容

(1) 青年会との来年度事業企画についての検討

(2) 集落住民との交流と青年会企画についての
意向調査

(3) 役場・高校との情報交換

(4) 新潟県事業報告書の策定準備作業

4) 行程

2月15日

10:00 阿賀町役場着・総務課・企画打ち合わせ

13:00 阿賀黎明高等学校 意見交流会

夕 室谷区青年会意見交換会・泊

2月16日

9:00 阿賀町役場・新潟青陵大学との意見交換

午後 集落巡検等

夕 室谷区竹会との意見交換

2月17日



午前 除雪ボランティア

午後 住民との交流会

2月18日

午前 除雪ボランティア

13:00 室谷区発・帰路

5. 考察と成果

(1) 参加学生・生徒の声から

ふるさとキャンプを通じての効果を検討するための参考とするため参加学生・生徒より感想を次の質問項目を設定して収集した。主な回等を以下にあげる。

※質問項目（以下4点に対してお答え下さい）

- ①何を学んだのか？
- ②とくに、どのようにそれを学んだのか？
- ③今回の学習・経験がなぜ重要なのか？ どうしてそれが意味のあるものなのか？
(重要でない、意味がない、とする場合はその理由)
- ④どのようにこの学習を活用することができるか？ 自分自身や自分の学びの質、将来の経験や地域貢献の質を高めるために、学んだことを踏まえてどのような目標設定が可能か？

1) Aさん

- ①阿賀町(特に室谷)における歴史。(遊び、文化、地形、生活等)
- ②地元のおじいちゃん、おばあちゃん、青年会の皆さんへの聞き取り。
- ③外部からその地区のことを知るには、実際にその地域に住む様々な世代の方に話を聞くことが重要だと思う。また、今後の活動(ふるさとキャンプ)を充実させていくには、以前調査していなかった、遊びや歴史の部分を知って取り入れて行くことが必要。私個人としても、さらなるコミュニケーション能力の向上を感じることができた。
- ④自分がこの地域でどのようなことをしたいかという考えを持ちつつ、住民の意見を聞いてさらに考えていくことが必要になる。また、このような調査で培われたコミュニケーションの方法は、将来仕事をしていく上でも活用していくことができる。今後は会話だけで

はなく、話を聞き出すという部分に重点をおいてコミュニケーションを取れるよう目標をおきたい

2) Bさん

①室屋の歴史(訪問させていただいた方の今と昔の生活と歴史)と生活(生活背景や実情)

②実際にお宅に訪問し、お話を聞く。その後聞き込みを行ったメンバーで話し合い。(方言が強いため聞き取れなかったことを再確認するため)また、実際に室屋を歩いたり、体験させてもらう。

③今回の学習が重要である理由は、プログラムを作る上で自ら現状を調査し知ることが大切なのだと再認識できたからである。実際に訪問し話を聞いた際、「昔の話が分かる人は誰もいない。」と若い世代に皮肉(?)を言いつつも、今の青年会の方々のことを、昔と違い気持ちのいい人たちばかりだとべた褒めだった。同じ地元の方々でも世代間での認識の違いが強いように思えた。重要なのは離れた世代同士で知識・意見の交換を行うことであり、新しく地元の魅力を知ることにつながるのではないかと。(まず地元から情報共有をする)

④反省として、私自身どうしたらいいかわからず色々な人に頼ってしまい進んで自らが聞き出すなどのコミュニケーションを取らなかった。せっかく機会を設けてくださった相手にも失礼だった。また、会話を続けることで新たに発見ができたこともあったかもしれない。今後の自分の成長のためにも、相手の話を聞きながら理解しさらに聞いてみたい点をすぐに見つけ会話を繋いでいくことを目標として設定したい。

3) Cさん

①室谷地区についての歴史等について(ダム建設や旧地区についてを中心に)

②地域住民への聞き込みや地区の見学

③都市部についてしかほとんど知らない私にとって農村地域の暮らしについて知る良い機会になった。また、異なる地域や世代との交流をすることによってその人たちの考えについて知ることができた。

④今回の実習で私は何をやればよかったか、実習の意義みたいなものを理解できていなかったのが反省点である。しかし、青年会の人たちや地域の人との交流は自分にとってとてもプラスになるものであった。ただ、今回のように何のためにやっているのか、地域の人には私たちに何を求めているのかきちんと把握して行っていくことが大切であると感じた。

4) Dさん

①阿賀町(室谷)の歴史や文化

主に食文化について学んだ。

②室谷地区在住の二人のおばあちゃんに実際の料理を見せてもらいながら、食材の調達の話、いくつかの料理の調理法を学んだ。

③外部の人間と一緒に活動するにはまずその土地のことを知ることが重要だと思う。

その時書物だけでなく実際に人から聞くことで、より身近で分かりやすく、地元の人とも打ち解けることができると考えられる。

④今回の実習で、質問をしようという意識をしたができず、改めて人との対話力・コミュニケーション力が必要だと実感した。中でも相手が言いたいことを理解し聞く力、相手が話しやすいように質問を振る力が重要だと考えた。

こうした学習や調査以外でもコミュニケーション力は非常に有用だ。しかし一朝一夕で身に付くものではないため、意識的に友人同士の会話や家族との会話などを積み重ねて力をつけていきたい。

5) Eさん

①阿賀地域の(食)文化、歴史を学んだ。

②主に食文化を学んだ。地域のお年寄りのお宅にお邪魔し、手料理をいただきながら聞き取り調査を行った。料理の材料、調理法、保存方法等を教えていただくことで、その料理が作られた環境的、歴史的な背景をも学んだ。

③今回の学習・経験が重要なのは、その地域の特徴を学ぶことで、他との差異であり魅力を知ることができるからである。

今まで知り得なかった地域独自の発展を目の当たりにすることで、その地域に対する印象が好意的に変化し、唯一無二のものへとなる。そのことが、新たな学習への意欲へと繋がると考えた。地域の人々も、他の地域からの意見やアイデアを取り入れることが可能になり、相互発展が望める。

④今回の学んだことや疑問点を生かし、更に細かく食、歴史等の学習到達目標を設定し、次回に繋げることができる。今回の研修では、初めてということの甘えがあったと反省した。何も学ぶのかをよく理解できていないまま活動していたことが多かった。その中で、地域の方々の優しさに助けていただいた。コミュニケーションを取ることで精一杯だったので、自ら進んで地域の方々と交流できるようにしなければならないと反省した。学習していく中で、全体的に受け身であったので、個人でも学習到達目標を設定し、与えられた作業だけをこなさないように、広い視野を持っていきたい。阿賀地域との繋がりは築き上げられた信頼関係によってできたものであるため、その繋がりを絶やさない努力を自らしていかなければならないと思った。

6) Fさん

人とのかかわり、一つの大きなイベントをやることで一体感が生まれる。別の組織で長となったときに、仲間意識を持つためにつなげていける。

7) Gさん

1人と人とのつながり、コミュニティがしっかりしている、お祭や青年会の活動を見ていて感じた。壁を作らないで接してくれる。地域の結束力、コミュニティの強さみたいなものは、あまり見られない光景なので地域というのは都会でもあると思うので結束力というのは重要になり、見習わなければならない。都会でもやっていく意味がある。歴史にあまりかかわるものを見られなかった。テレビ業界を目指しているので、PR活動などにもつながるのではないかな。

8) Hさん

地域の活動をしていくのは若い人は重要だと再確認した。今回のお祭やお楽しみ会の中心が青年会にやっけてできているところから。お祭のはじめにお払いをしたときに神主さんの後継者や代々続いているのか聞いてみたかった。活用はコミュニケーション的なところを、世代別のコミュニケーション的なところにつなげていけるのでは。

9) Iさん

学校などで硬い話を聞くよりもおばあちゃんのお話のほうがフランクに聴ける。その地域に根づいた話が聞ける。地域内での話の中に様々な問題がわかる。青年会だけではなく地域の人々のお宅にお邪魔するほうがいいのではないかな。いろんなところに積極的に個人で行こうと画策中。人との話し方などを学び、地域を知る。農業関係にためになることが増えた。

10) Jさん

結束力がすごいなと思った、子供会で2,3歳違いの子とは話すけど、幅広い年代の人たちとかかわれたことがインパクトがあった。見聞を広げるために、知識を深めるために実習に行っている、さらに深められるのではないかなと思った。

11) Kさん

人の温かさ、集落に入るとよそ者は排除しようとするのかと思っていたが、受け入れてもらえたのは2年間で築いてきたコミュニティがあったから。青年会の人や高校生、地元の先生方と話をしている中で感じた。地域の人たちは、かかわりが濃い、なんで逆に都会の人は近所の人とかかわりが薄いんだろう。20代くらいの独身女性はあまりいないのかな？進学、就職場所が近くにないのでは？

(2) 取組の成果物

本研究により集落活性化のための方策・仕組み構築につながる以下2つの成果を得ることができた。

1) 交流プログラムの構築

地域青年会が発案し、自走できる5つのカテゴリの交流プログラム及びそのラインナップが作成された。

- ①里山プログラム ②溪流プログラム ③食プログラム ④伝統・文化・行事プログラム
⑤室谷体験おたのしみ企画

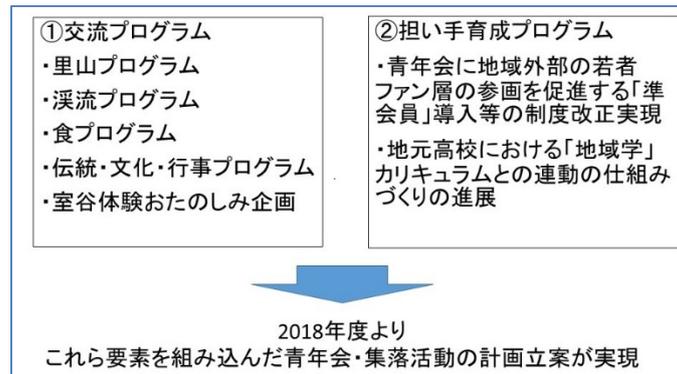
<ul style="list-style-type: none"> ・川遊び ・釣り ・魚突き ・秘密基地づくり ・登山 ・登山飯 ・山菜取り ・室谷逃走中 ・【】 戦闘中 ・スタンプラリー ・散策 ・室谷駅伝 ・マラソン ・雪合戦（個人団体戦） ・雪だるまコンテスト ・スポーツ雪かき ・花見 	<ul style="list-style-type: none"> ・喫茶 カフェ ・方言辞書 ・クイズ ・室谷レポート (YouTuber) ・キャンプ ・公園遊具 ・肝試し ・怪談大会 ・花いっぱい運動 ・室谷カレンダー ・クリスマスツリー ・水切 ・植林植樹 ・名古屋 水質調査 ・なめこの駒うち ・自分のはしづくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・照明ブナ ・アケビ料理開発 ・かんじきづくり、レース ・寺子屋 ・虫取り大会 ・フォトコンテスト ・分校の行事再現
---	--	--

2) 担い手育成プログラムの構築

青年会に地域外部の若者ファン層の参画を促進する「準会員」導入等の制度改正が実現した。また、地元高校における「地域学」カリキュラムとの連動の仕組みづくりを進展させている。

以上の要素を組み込んだ青年会・集落活動の計画立案が実現し、2018年度より実施され

る予定となっている。

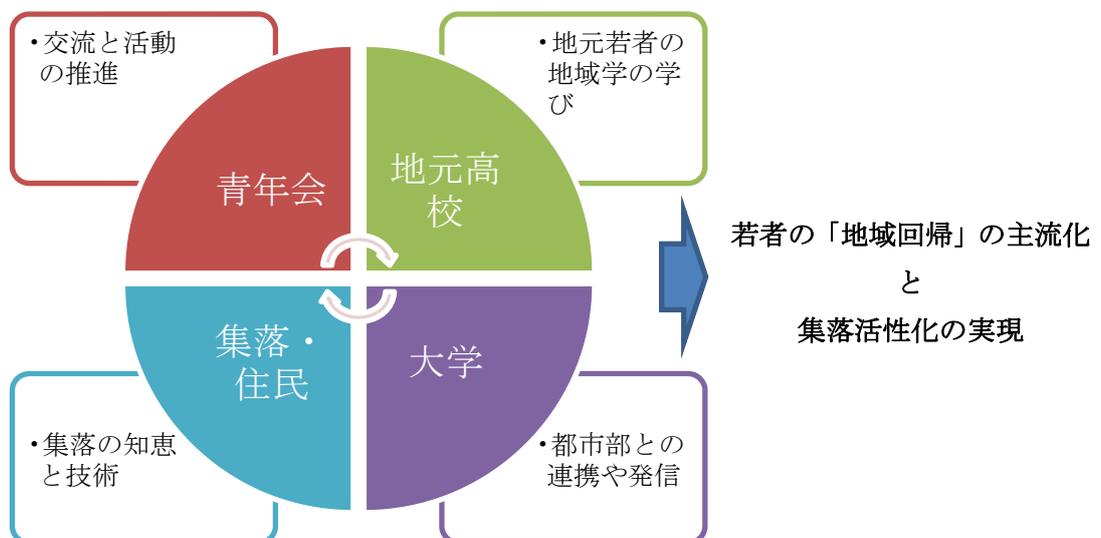


6. おわりに

当研究により、地域青年会が軸となった継続的な交流プログラムや担い手育成に向けた取組体制の構築を図ることができた。今後は、地域資源、特に山村資源を活かした担い手のための生業の構築を行っていくことが求められる。

ある集落の古老がおっしゃるとおり「ここに住むからには山の恵みを利用しなければ、意味がないだろう。私たちはずっとそうしてきたし、だからこそこに住むことの価値がある」といった言葉は重い。

今後はこうした交流プログラムや担い手育成プログラムを活用しながら、引き続き継続的な付き合いを深めつつ、地域集落の担い手が真に地域に根を下ろし生業を立てていくことができる産業作りの構築に向けたチャレンジを共にすすめていきたい。こうした努力こそ若者が求める地域回帰と集落活性化の実現につながるものと考える。



【研究ノート2】

「あきた元気ムラ・山菜ネットワーク」と首都圏大学との連携による地域生業と若手担い手人材育成の相乗的活性化方策に関する研究

大正大学エンロールメント・マネジメント研究所・地域創生学部専任講師 出川 真也

大正大学心理社会学部臨床心理学科3年 本多 龍

大正大学心理社会学部人間科学科2年 平良 菜月

大正大学地域創生学部地域創生学科1年 佐藤絵里花



【概要】

秋田県での調査研究活動・地域支援活動に対する補助事業「県外大学地域貢献活動誘致事業」（秋田県高等教育支援室）による調査研究活動。集落を基本単位とした活性化の取組である「あきた元気村・山菜ネットワーク」の加盟集落を巡検し、ヒアリング・取材等を実施。今後の首都圏との交流や物産等の発信、担い手育成の方策について検討を行った。

【キーワード】

集落活性化 担い手（人材）育成 首都圏連携 地域資源

1. 目的

首都圏連携等を視野に入れて「あきた元気ムラ・山菜ネットワーク※」を対象に、①地域集落を基本単位とする生業継承・活性化、及び②若手担い手人材の地域回帰方策について研究するための初動調査を行った。

※あきた元気ムラとは

「秋田県内の農山漁村集落で暮らすひとびとがそれぞれの持つ技や宝物を最大限に活かしながら一人一人が主役となって活性化に取り組んでいる地域のことをいいます。」(秋田県あきた未来創造部活力ある集落づくり支援室発行「あきた元気ムラの山菜・きのこ」パンフレットより)

2. 日程

3月11日(日)～14日(水) 3泊4日

3. メンバーと関心領域

当プロジェクト参加メンバーとそれぞれの関心分野は以下の通りである。

1) 出川 真也(大正大学エンロールメント・マネジメント研究所・地域創生学部専任講師)

社会教育・生涯学習論。地域集落における若者の地域回帰志向の形成プロセス。地域を担う人材育成とそのための交流・教育プログラムの構築。

2) 本多 龍(大正大学心理社会学部臨床心理学科3年)

臨床心理学(コミュニティ心理学)。地域集落におけるコミュニティ構成メンバーの心理的課題等に対するカウンセリング活動の有効性と可能性について。

3) 平良菜月(大正大学心理社会学部人間科学科2年)

教育心理学。社会教育(公民館)活動、コミュニティ・福祉活動等を契機とした地域人材育成研究

4) 佐藤絵里花(大正大学地域創生学部地域創生学科1年)

経済・経営学(経営人材育成論)。秋田県へのUターンを希望。座ガモール・朝市等の運営メンバー。

4. 調査・研究内容

今後の継続的な研究・実践活動を検討するための初動調査として、以下の取組みを実施した。

①山菜等を中心とする地域生産物・産品・集落活動調査

②山菜等の地域資源を軸とした首都圏発信・PR・交流策に関する研究

③学生と集落の連携活動プログラム設計のための地域調査

以上を通じて、集落を基本単位とした生業活性化、及び、若手担い手の地域回帰方策について検討するための知見を深めた。

5. 調査地域と内容

(1) 調査地域

あきた元気ムラ（山菜ネットワーク）加盟地域

①南部地域

由利本荘市赤田・三ツ方森地域、横手市金井神・上坂部地域

②北部地域

男鹿市鮪川地域、五城目町馬場目杉沢地域、上小阿仁村南沢地域
能代市梅内地域、大館市山田地域

③内陸地域

仙北市田沢地域

(2) 内容

①活動者への御挨拶・ヒアリング（各地区 40 分程度）

②生産現場・加工場等地域概況の視察



7. スケジュール

11日(日)

- 17:00 由利本荘市赤田地区到着
住民との意見交換
赤田地区公民館等施設泊



12日(月)

- 9:00 活動地等視察・ヒアリング
・由利高校
・由利本荘市三ツ方森地域
・横手市金井神・上坂部地域
- 15:00 秋田県庁
集落支援課及び高等教育支援課訪問
情報交換
- 17:00 男鹿市鮎川地区着
住民との意見交換
公民館等施設泊



13日(火)

- 9:00 活動地域等視察・ヒアリング
・五城目町馬場目杉沢地域
・上小阿仁村南沢地域
・能代市梅内地域
・大館市山田地域(NPO 理事長と面談)
- 17:00 仙北市内泊(乳頭温泉)



14日(水)

- 9:30 活動地視察・ヒアリング
・仙北市田沢地域
- 11:00 帰路



8. 今後の展望

本取組を契機にして、中・長期的には以下フローの波及展開を検討している。

①首都圏学生・県内集落の交流・学習活動の活性化、地域産品の首都圏側への若者を通じた PR 発信活動実施



②地域住民側の交流・受け入れ・人材育成の促進と首都圏学生の県内 U・I ターン人材の育成



③地域資源を活かした生業形成と若手担い手人材の県内回帰の実現

おわりに

心理社会学部人間科学科 2年 平良 菜月

本書では、社会教育主事課程の授業取組みを中心としながら、平成 29 年度の研究・教育・実践活動の主だった活動を掲載しました。

I～IIIでは、通年授業「生涯学習施設実習」における地域文化創造館、みらい館大明、区男女平等推進センター（エポック 10）での実習活動の報告を掲載しました。忙しい中懇切丁寧な指導をしていただいた施設関係の皆様には誠に感謝の念に堪えません。ありがとうございました。

IVでは、研究ノートとして、新潟県阿賀町室谷地区の青年会や地元高校生との連携による学習・実践活動と、秋田県「あきた元気ムラ・山菜ネットワーク」を対象とする取材・ヒアリング活動の概要を掲載・紹介しました。それぞれ平成 29 年度新潟県大学生の力を活かした集落活性化事業、平成 29 年度秋田県県外大学地域貢献活動誘致事業の助成支援をいただきました。現地でご協力くださった住民活動者の皆さんや側面的支援を惜しまずご対応いただいた行政関係者の皆さんにここに感謝申し上げます。

コミュニティの能力を高める学びの創出を目指して
-多様な人々の参画による地域学習活動のデザイン構築-
平成29年度生涯学習施設実習・研究活動報告

発行日 平成29年3月31日

発行 大正大学社会教育主事課程

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

印刷 株式会社ティー・マップ